

特 116

171

新撰

佛

教

讀

本



始



特116
171

佛 教 讀 本

第一編 佛傳之部

第一課 歸三寶の偈

自ら佛に歸し奉る、當に願くば衆生と共に大道を體解して無上意を發さん。
 自ら法に歸し奉る、當に願くば衆生と共に深く經藏に入りて智慧海の如くなり。
 自ら僧に歸し奉る、當に願くば衆生と共に大衆を統理して一切無礙ならん。

— 華嚴經の行品 —

古へより佛門に入りし人々は、その在家たるごと出家たることをえらばず、悉く歸三寶の偈を稱へきたりぬ。三寶とは佛寶、法寶、僧寶の三にして、世の人々の身命財の三を無上の寶とするに對し、出世の人々の寶として道を修むる者の重んずる所なり。而して歸三寶の偈とは、三寶の恩德により、かぎりなき禍ひと疑ひとの障りをのが

大正

12 7

内交

れて、解脱の境に遊ぶを得たる心情の喜びをかたちにあらはせるものなり。

第一に佛に歸し奉ることは、限りなき智慧と慈悲を以て群生をみそなはし、それが救済の大道を、成じたまひし釋迦牟尼世尊に對し、遺弟の瞻仰と追慕をさゝぐる意なり。

第二に法に歸し奉ることは、釋尊所説の教法たる經律論の三藏に對し、遺弟の尊崇と領解をさゝぐる意なり。

第三に僧に歸し奉ることは、世尊のもこに和合共住せる聖僧に對し、これを師とし、若しくはこれを友として、遺弟の憧憬と敬愛をさゝぐる意なり。

吾等は今や思慕やむことなかりし世尊の高き人格と、その教法とを學ばんとするに際して、厚き因縁を念ずること共に、己が身命財をす

つるの思ひに住して、深く三寶敬禮のまことさをさゝげざるべからず。かくて廣く世に流るゝ邪師邪法及び迷侶に對し、まさしき三寶をあらはすの意氣を涵養せざるべからず。

第一二課 釋尊の降誕

數ある宗教のなかに、大聖釋尊によりて示されし佛教は、その教の幽玄なる點に於て最も勝れたるものなり。釋尊出世の當時は、印度に諸派の碩學あり、支那に孔老二氏あり、希臘にソクラテス等ありて、數多の大なる思想家の現はれし時なれば、げに世界文化の華ともいひうべかりしなれど、これらの諸學派の教も、遂に釋尊の思想には及ぶべくもあらざりしなり。加之、釋尊出世に後るゝこと數百年にして世に出てし基督に至りては、その宗教の宣布に於て或は

基督

くらぶるを得べけんも、その思想の深遠なる點よりこれを見るべきは、また同日の論にあらざるなり。今や吾人はかゝる偉人の事蹟をしるし、かつその教の要旨を究めんとす、是れ人生の一大快事にあらずや。況や、その行蹟と教法とは、吾等が現在唯一の慰藉なるに於てをや。

大聖釋迦牟尼世尊は、中印度憍薩羅國の北隅なる迦毘羅城(東西十二里、南北三里)の王宮に、淨飯王の太子として生ひ立ちたまひぬ。御誕生の地は迦毘羅城を距ること十五英里ばかり東なる、水清く華うるはしき藍毘尼園にして、今を去る二千五百有餘年前の四月八日の早曉、母君摩耶夫人四十五歳の御時、その生家たる拘利城に還らんとして、過ぎたまひし御途すがらなりき。

傳によるに、太子誕生の際は夫人の右脇より生まれ、梵天王、老

瑞相

刹帝利姓

女と化現して金網を以て太子を受け、一天人兩指を口に當て、笛を鳴らし、以て歡喜の情を表はすと共にもろくの瑞相あらはれ、太子また地に下り、四力上下をみそなはし、歩むこと七歩にして、「天上天下唯我獨尊」と獅子吼したまひしと。されどこれらの不思議なる説話は當時の人々がその人を尊く仰がんがために、詩の如くに麗はしき譬喩を以て現はせるものにして、必ずしもありし事實には非らざるなり。即ち右脇より生ぜりとは刹帝利姓のしるしにして、もごこの姓は梵天の脇より生ぜりとの傳説に依れるものなり。又、天上天下唯我獨尊の語は最もよく釋尊の御一生をあらはせども、これは滅後の遺弟がその御誕生を讚嘆せん爲にさしげし言葉に外ならず。但、これらの尊き物語のおこりについては、太子の誕生が世の常の人々より勝れさせたまひし故にして、また當時の人々の信仰の

供養祭祀

いかなるものなりしかを知るに重要なものといふべし。
 惟ふに、太子の誕生は、久しくよつぎの王子を有し給はざりし淨飯王にござりては、實にあふるゝばかりの喜びなりしと共に、迦毘羅城の臣民もまた大に歡びぬ。これ己れの死後は全くよつぎびこの供養祭祀によりて禍福相分るこの信念ありしによるものにして、また國の盛衰いかんは實に將來の發達にかゝはるを以て、太子の誕生はこれら幾多の望みをかくる唯一のものたりしなり。されば父王は歡びの情抑へがたきと共に、深く太子の將來を憂ひたまひ、直ちに有名なる婆羅門の學者阿私陀仙人をして相せしめたまひぬ。阿私陀、王子の上に輝ける圓かななるみすがたを觀じ了はりて、潜然として涙を下せり。淨飯王甚だこれを怪み、吉凶いづれなるかをたづねたまへば、仙人歎じて曰く、「王子もし出家せば一切種智を成ぜん、もし

婆羅門

一切種智

轉輪聖王

王宮に在らば轉輪聖王となりて四天下を領せん、唯、我が命まきに終らんとし、遂に此を見るを得ざるを恨むのみ」と。かくて太子誕生の第五日、命名式を擧げたるに、百八十有餘の婆羅門の諸學者つごひて、淨飯王及び城民の爲めに最好の美稱を選びて、喬答摩と呼び、又は悉達多と名け奉りぬ。これ蓋し太子將來に、必ず一切の事業を成就し得べしとの、希望によりて名けられしものなるべし。
 されど歡樂未だ盡きざる迦毘羅王宮には、げに悲痛の事こそ生じけれ。いかなる故にや、母君摩耶夫人は太子生れ給ひし日より、七日を経て逝きたまひぬ。母なき太子は、茲に於て父王の第二夫人即ち摩耶夫人の妹なる波闍波提の御手によりて、慈悲深く哺育せられたまひぬ。

第三課 王宮の生活

八

五明四吠陀

北には峨々たるヒマラヤ山の連脈ありて、千古の雪を戴いて天表に秀で、南は幾多の川流の滾々としし、ガンジスに朝宗するを見る迦毘羅城は、實に地勢平坦にして滿野葱菁を以て蔽はれ、鬱鬱として富國の形勢を成す。而して吾が太子はロピニ河上に聳ゆる莊大華麗なる宮殿の中に、この大自然を背景として、生ひ立ちたまひしなり。數多き侍者にかしづかれて次第に長じたまひし太子は、七歳にして跋陀羅尼婆羅門より初歩の教育を受け、進んで五明四吠陀の學を修めたまひぬ。これ當時のあらゆる學書にして、太子はよく此等に通じたまへるのみならず、武藝に於てもまた缺くる所なく、文武兩面に勵み、數歳を経てこそごとく其道に達したまへり。

厭世觀

かくも智勇兼備の太子にましませども、沈思の情ふかくして、早くより人生の寂寞を觀じ、ここに他の生物に對し憐愍の情あつかりき。これ天稟の御性格なりとはいへ、一は幼にして母君を失ひたまひしと、一は吠陀の修學により、その厭世觀は御心に深く根ざすに至り、以て人生及び世界の問題に關し、嚴肅なる考察を爲すべき素地を造られ給ひしによるならん。

閻浮樹

太子御歳十六、ある日出で、城外に遊ばんことを請ひたまふに、父王乃ち之れをゆるし、自ら太子及び臣僚百官を率ゐて諸方を遊覽し、次いで王室御料の農場に於て親耕式を行はんとて、女官をして太子を閻浮樹の下に侍護せしめたるに、たま／＼農夫の鋏にて虫を殺すや、鳥來りて之れを啄む。太子之れを見て憐愍の心を起し、歎じて曰く「衆生憐むべし、互に相吞食す」と。乃ち樹下に端坐して

深く思ひに沈みたまひぬ。父王は此状を見るや阿私陀がさきに説きし所を追想し、太子の或は無常の念を生じて出家せんことを恐れ、直に城中に還らんごすれども、太子尙ほ此に停らんことを願ふに、父王は強いて太子を携へて還りたまひぬ。

之れより父王は深く太子の將來を案じたまひ、或は憂ひあまりて在家を樂しまざるべきかを慮り、いかにもして太子が厭世の念を醸さしめんものご、先づ三時殿を造らせ給ひて林池宮殿の美を極むるご共に、その九階の高樓には多くの佳麗なる侍女を置きて常に歌舞し、その艷容を以て太子の心を引き立てんごしたまへり。かくて太子は春秋の變遷につれて宮殿より宮殿に、さながら胡蝶の花より花に飛ぶ如く歡樂の巷に移り給ひぬ。

かくて御歳十九の春を迎へたまひしごき、拘利城の主、善覺王の

三時殿

息女、耶輸陀羅姫の顔容端正にして、才智また衆に勝れさせ給へるを迎へて正姫ごなし給ひ、尙ほ數多の姫(麗波、及び音華華色)をして太子に侍らしめて、そのみこゝろを引きさごめんごしたまひき。是に於てか、全殿玉樓の裏、螻首蛾眉左右に侍坐し、清歌妙舞日夕に演奏し、吾等が地上に於て得らるべきなべての歡樂は、悉く之れを擧げて太子のほごりに獻ぜしめられぬ。

第四課 釋尊の出家

いかなる障りなりごも、強き信念の前には何の力もなきのみならず、却て自由を得るための善き方便ごなるべし。父王がいかに世の欲樂によりて、太子がみこゝろをひるがへさしめんご試みたまふも、そが心中に隠然ごして興れる強き志願は没し得べくもあらず、反り

方便

無常觀

て太子をして之を忌嫌せしめ、ますくその出家を促すに至れり。抑々、遊觀嬉戯は心の欲する所に從ひて、之れを恣にしうべけんも、凡てはしばしの夢に過ぎずして、遂にさらへて己れが有さなすこと能はず、恍として過ぎ、邈として去り、境遇一轉すれば悲哀の情必ず之れに次ぐ。然るに、その最も甚しきものは、如何なる人々も免るゝ能はざる所の、老病死の苦みなりとす。惟ふに、吾人々類の生命は長しと思へば長けれど、短しと思へば短きを感じず。今日はすでに昨日にあらず、明日また今日にあらざるべく、一切は一瞬毎に過ぎ去りて永へに回らず、未來は一瞬毎に現在となれども、現在はたゞ刹那々々の轉變にして、水の逝くが如く、矢の飛ぶが如し。その速かなること、一生と雖、石火電光に異らざるなり。此の如き無常の思念は、吾人の心情を動かすに足らざるか。一生は眞に一夢に似

たり。而して吾人の生命の兩端は直に不可思議に接し、死後と生前とは漠として知りがたく、たゞ知り得るものは、僅に不可思議の間に現はるゝ、海市一様の塵世に外ならざるを思はゞ、なごてか深遠なる考察によりて、安心立命の天地を願はざるべき。太子が出家の志願は月に日に強まり、迦毘羅城の危機は刻々に逼まれり。茲に於てか、父王は百方に太子の出家を防がんとし、殊に婆羅門の子、優陀夷をして太子と朋友たらしめ、且夕隨從して太子を慰籍するに務めしめぬ。

然れども時機は淳熟せり、太子御歳二十九、耶輸陀羅姫を納れたまひしより十年にして、羅喉羅王子誕生したまへり。これ實に太子をして、出家生活を促さしめたる一大原因にして、已に迦毘羅城主のよつぎを得たるを以て、自らは出家して、その志願を達するをう

出家生活

四門觀

へしと信じたまひしなり。加之、太子は城外に出て遊ぶに當りて、眼に觸るゝの光景は、一とじてその心情を動かさざるものなかりき。ある時は東門を出て、白頭の老人の腰かゞみ杖を支へて、見る影もなき醜き相にて、佇めるを見て思へらく、「日月流れて老の至るこそ電の如し、身安んぞ恃むべき、我れ富めりこそ雖、豈獨り免れんや、云何ぞ世人怖れざる」こと。ある時は南門を出て、顔色憔悴せる病人の、肉落ち骨出で息もたえなく、死の底に沈まんことするを見て思へらく、「世人悉く病苦を免れず、云何ぞ樂みにのみ耽りて畏れざる」こと。ある時は西門を出て、葬ひの輿を擔ひ、幾多の家人の泣き悲みてこれを送るを見て、優陀夷に謂ひて曰く、「なべての者この死苦を有す、云何ぞ畏るべきを畏れずして、こゝろ木石の如くなる」こと。こゝに至りて、太子の厭離の念は、いよく、切實にしてまた動

五欲

かすべからず、今や世間一切の痛ましき問題は、悉く自らのものとして痛感したまふに至れり。然るに、ある日北門を出てたまふや、優容せまらざる法服修行の沙門を見る。太子、優陀夷に問うて言く、「この異相の人は何人なるか」こと。優陀夷答へて曰く、「五欲の繫縛を離れて、崇高なる徳業を修する出家の沙門なり」こと。太子ひそかに思ひたまはく、「人生の理想はげに五欲の外にあるべく、かの静寂尊嚴なる面影こそ、我が唯一の理想なるべし」こと。

あゝ、人生の厭離と沙門生活の欣求との念は、太子をして、暫くも喧擾なる迦毘羅城に、留まるを得ざらしめぬ。即ち、十二月八日、夜も漸く更け、人静まりて風のみ蕭々たるの時、人世最後の別れを王宮の内外に致し、「三界怙むなし、唯道のみ恃むべし」こと打ち歎かせたまひつゝ、ひそかに御者車匿シヤツツに命じて健陟ケンシツといへる白馬に騎

三界

り、東南の方、藍摩城ラマに向ひて遁れたまひぬ

十六

第五課 釋尊の苦行

王位と財寶と限りなき恩愛とをあさにして、王宮を忍び出でたまひし太子は、一夜のうちに家もなき貧しきさすらひの人となりたまひぬ。太子は迦毘羅城より東南に向ひ、白馬に騎りて行くこと十七里にして藍摩城に到り、なほ城を過ぎて、日漸く出づるころ阿拏摩河アナのほごりなる深林に達せるに、その地の寂靜にして修道にふさはしきを喜びたまひ、乃ち瓔珞を去り、鬚髪を剃り、たま／＼その傍を通りし旅人の卑しき服と玉服とを取り換へたまひて、乞食沙門の新生に入らせたまひぬ。かくて愁ひに沈む車匿をして、白馬健歩を率ゐて王宮に歸らしめ、獨りうしろを顧みてなつかしみつゝ、吠

八苦

舍離城サリ附近に住せる跋伽婆仙人バカのもごへと急がせたまひぬ。此時に於ける太子の心中やいかにありけん、八苦の中に愛別離苦を加へたまふは、實にこの悲しみよりえたまひしなるべし。

當時婆羅門の修行者は全く世の繫縛を離れ、おの／＼森林の中に隠れて、一心に念ひを凝らし瞑想に耽るを常とせしかば、親しく彼等に師事せんには自らその所爲に倣ひ、森林中に入りて一個の行者とならざるを得ざりき。今や太子は大いなる決心を以て、解脱の道を求めたまふに際し、兼ねて跋伽婆の學徳高きを聞召され、この仙人に師事せんとして、道を南にさりて其前に跪きたまひぬ。

苦行

されどつらく其徒の爲す所を見るに、いづれも林中にありて嚴しき苦行を修せり。而してその説く所は、五情の慾愛滅殺によるにあらずば解脱をえずとして、偏に苦行によりて生天の果報を求むる

生天

にあり。太子即ち苦行はまことの解脱の道なるべきかとの疑を起し、跋伽婆仙人と論議問答して日暮に至るも決せず、一宿して明旦に至り、遂に生天は眞實の解脱にあらずと知りて仙人の説に服せず、更に南行して王舎城に向ひたまひぬ。

こゝに、迦毘羅城にありては太子の隠れたまへるを知り、上は大王より下は臣民に至るまで、驚駭ここに甚だしく、各所に人を遣はして尋ねれども、一人の之れを知れるものなし、時に車匿、健陟を牽きて歸り來り、つぶさに事の由を奏するに、大王いたく愕きたまひて自ら太子を訪はんと逸りたまひしも、群臣しきりにこれを諫めまつりしかば、茲に二人の大臣をして太子を追ひ、その志を抑へんことを命じたまひぬ。大臣等王命を受け、直ちに跋伽婆仙人の深林に向ふに、太子はすでにこの地を去りて王舎城に向ひたまへり聞き、急ぎ馬

首を轉じて更に進むに、中途はるかに太子の樹下にありて、端坐思惟したまふを見る。即ち恭しく進みてまうさく、「太子出家したまひしより、父王並に後姫を初め、一族群臣の悲み喩ふるに物なし、願くばすみやかに歸らせたまへ」と。太子凜然として告げて言く、「汝等歸りて、父王と姫と群臣と城民とに告げよ、我れ今生に老病死の苦みあるを見て、將來ながくこの患を絶たんと欲す、我れ今父王に遠遠する所以は、將來の和合をなさんが爲のみ」とて、言ひもえをへず、直に大臣等を棄て、去りたまへり。使臣等、太子の決心を動すべからざるを見て、我等すでに王命を稟けつゝ、何のかひもなく、今空しく歸りて如何に奏答し奉らん、當に使臣の中より聰明にしてかつ忠實なるもの五人を擧げて、太子のほごりを護らしめんとして、乃ち憍陳如等の五人をして太子を従はしめ、他はすべて宮城に歸れり。

是より太子は、橋陳如等の五人(橋陳如、跋提、婆提、摩訶、阿提)に守護せられて歩みを進め、遂にガンジス河の急流を渡りて摩伽陀國の境界に入り、その都府なる王舍城を過ぎたまひけるに、城主頻毗婆羅王、之れを聞いて大いに驚き、いかにもして出家の志を讎さしめんご、乃ち駕を命じ、太子を般荼婆山に訪うて曰く、「我れ深く太子が聰明の資を以て、自ら王位を捨て、遠く此土に來れるを悲しむ。太子、もし父王尙ほ在すを以ての故に、王位に即くご能はずせば、當に我が國の一半を與へて之れを統治せしめん。若し我が國の一半を以て狭しごせば、我れ當に國を捨て盡く相奉じて以て太子に臣事せん。また我が國を取らざらんご欲せば、當に四兵を供すべければ、自ら他國を攻伐して之れを統治せよ。太子の欲する所、蓋しこの二者の中、何れかその一に居らんご。蓋し王は常の世の慾望を以て太子の志を

讎さんごせるも、太子また少しも搖ぎたまふごなくて、王に答へて言く、「我れ國を捨つるはもろくの苦惱を斷たんがためにして、世間の五欲を得んごするにあらず、人の世に生まるゝや老病死の三災を免れず、我れをして王たらしむるも當に死ぬべき時、我れに代はりてこの厄を受くるものありや。若し代はるものなからんか、豈に憂ひなしごせんや。吾れ人生を觀するに一切無常、みな假にして眞にあらず、樂み少くして苦み多し、身は己れが有にあらざれば、久しく居ること難し。かくてなべてのすがたは、皆當に空無に歸すべきものなるに、衆生昏迷して且夕貪愛の癡網に覆はれ、生死の大海に沈淪す。このゆゑに我れ山に入り、苦の本源を滅して、證りの法を修せんごはするなりご。かたく王の請ふごころを辭し、且つ王に告ぐるに「當に正法を以て國を治むべく、必らず人民を枉ぐるご

阿羅邏迦蘭
鬱陀羅摩子

勿れ」このたまひて、疾く阿羅邏迦蘭の住處に赴きたまひぬ。

當時、王舍城附近の山林幽靜の洞窟には、修道に餘念なきもの、其人に乏しからず雖、殊に優れて生まれ高かりしは、阿羅邏迦蘭と鬱陀羅摩子の二仙人にして、太子はこの二仙人の名望を、跋伽婆仙人より聞召し、親しく道を問ふべきを指示せられて、遙かに尋り來りたまひしなり。太子即ち阿羅邏迦蘭について、生老病死の四苦を斷ずるの法を問ひたまふに、禪定の修習こそ唯一の要道なりとて、委しく説き示されしかば、太子は深く感ずる所あり、數月の久しき間、この仙人についてその學説を究めたまへり。されど尙ほ未だ太子の胸に満たざる所あり、次いで鬱陀羅摩子の下に至りて之れを問ふに、また意に滿つるものあらざりき。

是に於てか太子謂へらく、「まことの解脱の法はこれらの仙人につ

きて學ぶべきにあらず、當に自ら工夫を凝らし、考察を積み、種々にこれを求めて得ざるべからず」と。乃ち去りて尼連禪河の西岸優婁頻羅村の樹林に至り、當時の修道者が行へる戒行を修するのみならず、最も嚴酷なる苦行にかゝりたまひ、或は一日一麻を食ひ、或は一日一粒を食ひ、或は復た二日乃至七日に一麻米を食ひ、若し食を乞ふものあらばそれをも施し、ひらすら思惟と實行とに辛酸を嘗めたまひては、遂に六年の久しきに及びたまひぬ。

第六課 釋尊の成道

凡そ如何なる人も、その未だ事を成さざるに當りては、凡庸と異なるものにあらず、たゞ勇往邁進して事を成すに至りて、始めて眞の偉人となることを得べし。孔子といひ、基督といひ、事を成さざりせ

超過三界

丈夫志幹

ば世の人々ご何の擇ぶ所かある。彼の人々をして偉人たらしめしものは。唯それ事を成ぜるにあり。名將は幾多の戦鬪をなさざれば出て難く、大人は人生の激流に投ぜずんば顯れざるなり。況や超過三界の佛果を開かんごする、丈夫志幹の人師に於てをや。古より聖賢ご呼ばるゝ人にして、未だ曾て家を遁れ出でざるはなかりき。されば大道の威力を體現せんご欲するものは、大なる厭離ご欣求ごの覺悟なかるべからず。而して内に燃ゆる厭離ご欣求ごの思ひこそ、實に我が太子をして、六年の長き苦行に堪へしめし原動力なりしなり。

げに太子の苦練は、世の尋常のものにあらざりき。血肉乾涸して、形骸さながら枯木の如くなりたまひぬ。而して、かの五人の侍者もまた修行を共にせしかご、太子の苦行には及ぶ能はざりしを以て、ひたすら太子を稱讚し、必ず成道の期して待つべきを思ひ、奉事守護の

効むなしからず、以て父王大臣の負托の責に、背かざるべきを喜び合ひぬ。

されご太子の御胸は、限りなき悲しみを以て満たされぬ。未だ求むる所の光明は微かにも接するを得ず、願うて已まざる解脱は此れを得べき望みなし。已に父王に背き、妻子を棄て、臣民の願ひを斥け、知己の勧めをも顧みずして一向に進み來りしご雖、之れを當時の教へに求めて得ず、之れを己れの内に求めて得ず、あゝ太子の心情誰かよく之れを知るものやある。成道の後、八苦の中に求不得苦を加へ給ひしもの、實にこの歎きよりえたまへる血涙の文字なるべし。

是に於てか、太子つらく思へらく、「我れ苦行を修して六年の久しきに及ぶも解脱を得ず、是れ恐らくはまごこの方法にあらざるべし、我れ曾て閻浮樹下に於てなせる靜觀こそ最も可なるべけれ、我

れ正に食を受けて我が身を長養し、然る後思惟すべし」と。即ち尼連禪河に入りて身の汚れを除き、僅に樹の枝にすがりて岸に上りたまひしが、多年の斷食に疲れ果て、自ら支ふる力なくて、そのまゝ死せるが如くに倒れ給ひぬ。折しも森近く住める牧牛の娘の、その名を難陀婆羅と呼べるが、このさまを見て恭しく太子の御足を禮し、手に持てる乳を捧げまつりければ、夫子これを受けたまふに、神氣頓にもごに復し、五體俄かに力づかせたまひぬ。然るに橋陳如等の五人の侍者、太子の側にありて苦行を修めつゝありしが、まのあたりこのさまを見て、太子の心にぶりて苦行に耐へずとなし、その信念の動搖に對して、一片同情の念をも捧げざるのみならず、無情にも太子を捨て、婆羅奈斯城に近き鹿野苑コウヤエンに立ち去りぬ。

かくて太子は獨り伽耶ガヤに至り、菩提樹下なる金剛坐クワンガクザに、吉祥とい

六天八部

へるくさかり人の、輦草八束を供養せるを敷きて端坐し、我が道成らずば遂に此坐を起たざるべしと誓ひたまひて、七々日の間、靜かに禪定に入り給ひぬ。始めには心海動搖して、容易に平靜なるを得ざりき。是れ魔軍襲ひ來りて、その成道を妨げんとせしに由るものにして、佛典の作者は實に詩の如き巧みなる表現を以て、太子が心海の動搖を描き出せり。即ち、魔王波旬は太子の成道せんことを恐れて、染欲、悦彼、快觀の三女に命じて、太子の修行を妨げしめ、或は六天八部に命じて、怪面奇眼甚だ怖るべきもの林の如く、或は天界地界の諸鬼並に獄卒を合はせて、一億八千萬の兵衆を成じて悉く菩提樹のほごりに至り、熱鐵の丸を雨らし、劍戟火車もく空中に横へて火箭を射、劍を抛げ、天地に轟く惡聲を發し、大風を呼びて樹林を振はす等の凄愴なる光景を出せると共に、此等の攻撃の中心

に在りて、崇嚴に平和に、一毛をも動ぜずして端坐し給へる太子を描き出せり。これ即ち太子の心中にゆき、せる明暗の兩面を、かたちの上に現はし示せるものにして、その天地自然の大變動は、その誘惑煩悶の大なるを示せるなり。されば佛教の研究者は、常に形相に表現せられたる叙述に惑ふことなくして、そのまことの意義を味はざるべからず。

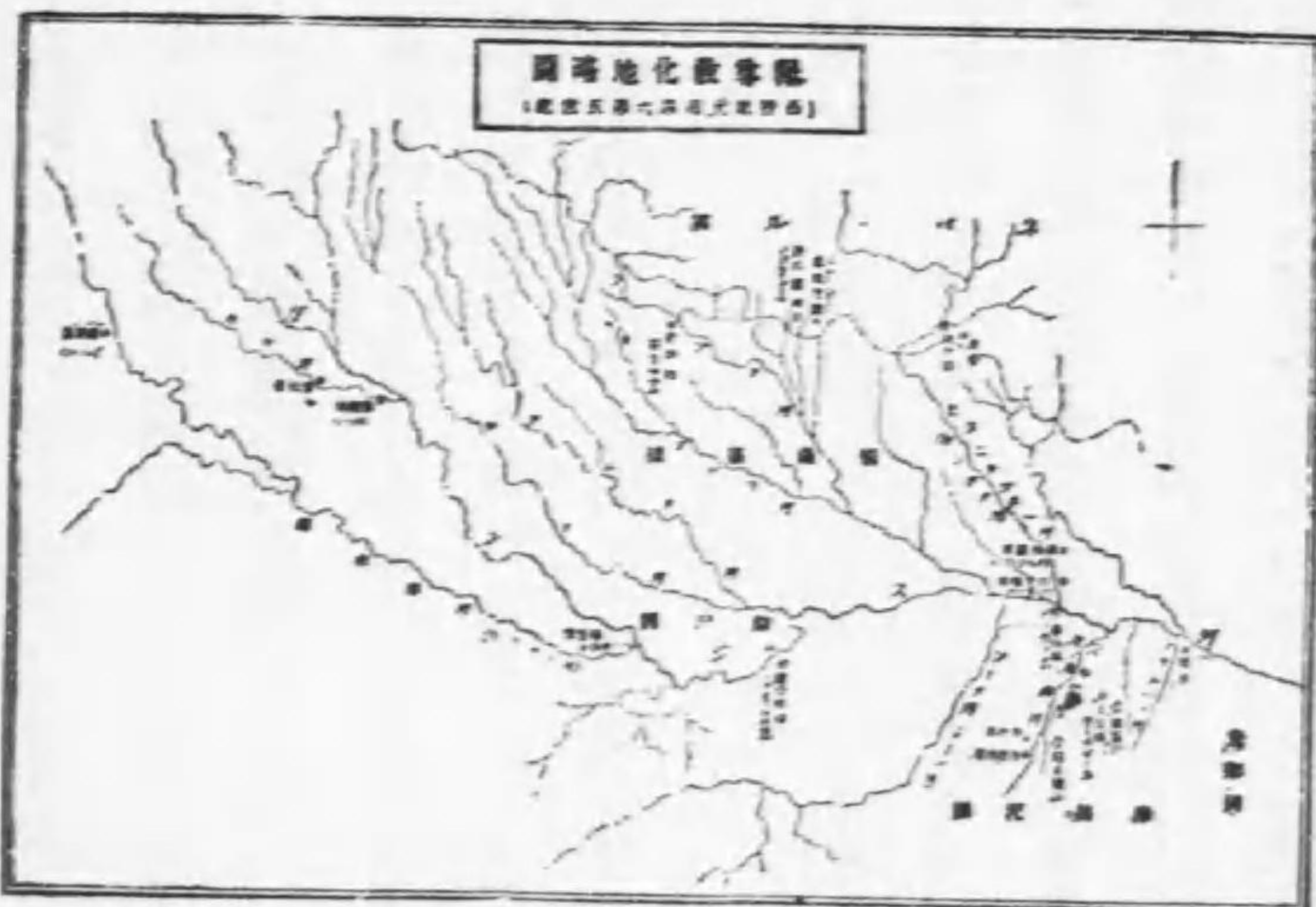
惟ふに、人生の無常を觀じて出家苦行を志したまひしより六年、而も苦行の空しきを知りたまひし太子は、こゝに進退その度を失ひて、信念の動搖また其極に達したまへり。即ち信念の動搖と共に、人生に對するはげしき愛著を感じそめたまひぬ。老いませる父王、花の如き后姫、玉の如き愛子、はた迦毘羅城民の躍りあがる歡び等、さまざまのまぼろしは太子の心にわき來りて、止み難かりしなり。人性の危

機、まさに此にあり。然れども太子は勝ちたまへり、迷夢は散りて忽然として心境は洞かに開き來りぬ。平安は水の如く太子の心中に流れ、人心の秘奥は物の境に映するが如く明かに、慈悲博愛の念は潮の如くみなぎりそめぬ。これ即ち、太子三十五歳の十二月八日の晨、明星空にひらめくの時、吾が太子は正にかぎりなき禍の根を斷ちて、無上正覺を成じたまひしなりき。

第七課 釋尊の教化 (その一)

一國の太子は今やその志願を成じて、衆生の依信を繋ぐべき佛陀となり、天上天下唯我獨尊の大なる自覺を生じたまひぬ。されどこの自覺は種々の儀式、苦行、論議等の効なきを悟りし後に、深き思惟によりて得たまひしものなれば、供饗供養等を信ずる人々を、釋尊の自

海印三昧



覺との間には、大なる距離を存するなり。され成ば道の後三七日の間は、菩提樹下に於て入定思惟して、未だ言語に表はれたる説法なかりき。かの華嚴經は、この時、佛陀の海印三昧中に味ひたまひし法門なりといふ。而して佛典には、世尊所證の法門は甚深微妙にして、薄福鈍根の衆生の解領し得べきものにあらずれば、我れ寧ろ涅槃に隠れん」と

梵天帝釋

つぶやきたまへるを、梵天帝釋、群生に代りて説法を勸請せしかば、遂に人々に説き及ぼさんここに決したまへり」と記せり。これ即ち、世の人々を釋尊の御自覺との間に、大なる距離あるを覺えたまひて、説法すべきか否やに就てためらひたまひし心狀を、形の上に現はせるものなり。

釋尊の宣傳

是に於て、釋尊先づ智慧勝れし阿羅邏仙人、及びこゝろ敏き鬱陀羅仙人を度せんと思ひたまひしも、已に身まかりしかば、憍陳如等の五人を度せんとして、直に婆羅奈斯城に赴きたまへり。その時、路に提謂波利の二商ありて、世尊に見えて蜜麩を献ぜる縁により、初めて説法したまひて、三寶の中の佛法の二寶に歸依せしめたまひき。世尊は即ち彼等の願に従ひ、自ら數本の頭髮を抜きて、之れを崇むべしとして二商主に與へたまひぬ。これ後に佛塔の起る始めにして、二商主

最初の佛塔

は優婆塞の最初なり。

又途に優波迦なる少年に逢ひたまひし時、彼れ世尊のみすがたの端巖にして温雅なるを拜して、其たゞならざるに驚き、世尊に問うて曰く、「世間の衆生は慾愛に繋がれて、かろくしくも外境にのみ馳せまごへり、今、世尊を見るにそのみすがた極めて寂靜なり、恐らく殊勝の法あらん、何人を師としまひしか」と。世尊答へたまはく、「我れは轉變無常の法を脱れて、微妙深遠の法を得たり、三毒五欲の境は永く遠離して、恰も蓮華の水中に在りて濁水に染まざるが如し、我れには師なく、又我れに等しきものもなし、我れは今や一切有情に、最勝の法を宣説せん」と。婆羅奈斯に赴かん」と。

五比丘の入道

かくて世尊は鹿野苑に向ひたまふに、かの五人遙に世尊の來たまへるを見て、相共に謂ひて曰く、「沙門喬答摩、苦行を捨て、退轉し、

四聖諦
八聖諦

道心なくして飲食の樂みを欲して今此に來れり、我等起ちて之れを迎ふるを要せず、又彼れがために坐を設くる勿れ、何の禮敬をか須ゐん」とて、各々默然として住せり。然れども、世尊漸く近づき來りたまふに、五人は覺えず坐より起ちて禮拜奉迎し、互に使役を爲し、或は衣鉢を持するあり、或は水を取りて盥漱に供うるあり、或は御脚を洗ふあり、かくて何れも其本誓に違ひぬ。即ち世尊徐に、四聖諦、八聖道の理を説きたまふに、氷の如くに不信なりし五人も、憍陳如を第一としておの／＼その教を解了せしかば、五人共に鬚髮を剃除し、世尊の「善來」とのたまふ言葉の下に、阿羅漢となり、以て初めて僧寶を成ずるに至れり。

耶舎の入道

世尊、鹿野苑に止まりたまひし間のことなりき。婆羅奈斯國の長者の子の、その名を耶舎と名けて、柔和にして親しみやすき青年あり

しが、たま／＼世尊の説法を聽いて忽ち誘化せられ、世を厭ふ心深く切にして、直に世尊の弟子となりぬ。次いで耶舎の父わが子の所在を尋ね來りて、また世尊に誘化せらる。これを三歸優婆塞の最初となす。耶舎の母及びその妻も、また誘化せられて佛弟子となれり。これ女人教化の最初にして、即ち三歸優婆夷の最初となす。次に耶舎の朋友たりし五十の長者の子あり、耶舎の出家せるに感じて、その所爲に倣ひ、悉く佛弟子となりぬ。かくて世尊が鹿野苑に到り給ひしより三ヶ月にして、五十六人の佛弟子あるに至れり。

弟子の宣教

是に於て、世尊は一日諸弟子を集めて語りたまはく、「我愛すべき比丘達よ、汝等は五情の繫縛を脱れて、限りなき光榮ある境地を樂しめり。今や汝等は世界の土福出となるに堪へたれば、各々異れる地に遊化して其使命を果すべし。必らず同じき道を行くべからず。

さらば行いてこの最勝の法を宣傳せよ。よろしく此の教法の内容と特長とに心を注ぎ、誰人たるを問はず、明白を旨として白晝にあるが如くにし、効果ある行業を實行せしむる道を示すべし。さらば汝等の赴く所、必らず最勝の法に耳傾くる多くの人あるを見るべし。我れは今より摩伽陀國王舎城に道を取りて、當に有縁の諸民を度すべし」と。これ即ち世尊が諸弟子に對して、傳道の任を與へ給ひし最初の説法なりき。

三迦葉の歸佛

世尊は諸弟子と別れて王舎城に至りたまふ途すがら、優留毘羅の森ちかく幽居を占めし、二人の迦葉兄弟を訪れたまひぬ。第一は優留毘羅迦葉にして五百の弟子を有し、第二は那提迦葉とて三百の弟子あり、第三は伽耶迦葉と名けて二百の弟子を有せるが、何れも智徳共に當時にすぐれて名望甚だ高く、上下の歸依また篤かりき。世尊は

曾て六年苦行の折、一たび訪ひたまひしことあるも、其説に服し能はざりし所にして、今や世尊はその知遇の恩を報ぜんために、初に優留毘羅迦葉を尋ねたまひぬ。されど頑強なる迦葉は、年長の故を以て、世尊を年少の沙門と輕んじ、固く己れの説を守りて、たやすく降るべくもあらざりしが、遂に誘化せられて佛教に歸し、數多の弟子と共に、鬚髮を剃除して比丘となりぬ。是に於て、那提迦葉及び伽耶迦葉も、亦兄の所爲に倣ひて、各々弟子と共に教團の人となり、悉く世尊に従ひて王舍城に赴きぬ。

第八課 釋尊の教化（その二）

頻毘娑羅王の歸佛

頻毘娑羅王の歸依厚かりし優留毘羅迦葉の、今は沙門となりて世尊に従へるを見て、王及び城民の驚きは一方ならざりき。或者は世

竹林精舎

尊が却て迦葉に、歸依したまひしには非ざるかと怪みぬ。是に於て世尊は迦葉をして、歸佛の因縁を説かしたまふに、頻毘娑羅王これを聞いて大に喜び、世尊の深遠なる智慧に驚歎し、遂に世尊の説法を請うて佛法に歸依するに至りぬ。即ち王は歡喜のあまり、所有の迦蘭陀竹園を獻じて精舎を建立し、佛及び四方僧のために説法止住の所となしぬ。蓋し、國王にして佛法に歸依せるは王を以て初めとし、伽藍は竹園中に建てたるを以て初めとなすなり。

舍利弗目連の出家

此頃のことなりき、王舍城外なる那爛陀村に、優波底沙及び拘利陀と名けし二婆羅門ありしが、頗る聰明にしてよく當時の教學に通ぜしかば、人々の尊び敬ふこと厚かりき。此等の二人は學友にして、曾ては共にほまれ高き刪舍耶に學びて、其徒二百五十人中の高足たりしが、刪舍耶死ぬるに及びて、新に師とすべき所を求めつゝあり

しかば、互に相誓ふらく、「先に道を得んものは必ず之れを他に継ぎて、敢て吝惜することなかるべし」と。時に五比丘の一人なる阿説示の、衣を著け鉢を持し村に入りて行乞しけるが、擧止安靜にして風丰また肅齊、毫も俗習を帶ぶる所なし。是を以て、路行く人の此れを見るもの、自ら恭敬尊重の心を生ぜり。たまく、優波底沙、途上にて阿説示に逢ひ、その容貌態度のたゞならざるを見て喜びに堪へず、覺えず進みて問うて曰く、「我れ今尊者を見るに、出家して日尙ほ淺きに似たり、然るに五情を制すること何ぞ能くことゝに到れる、希くば尊者の師は何人にして、その教は如何なる法ぞや」と。阿説示答へて曰く、「今我が師とする所は、一切種智を得たまへる釋迦牟尼世尊にして、我年尙ほ少く、道を學ぶの日亦淺ければ、師の教を述ぶることいと難けれど、聊か要を撮りて示さんに、「一切諸法は本

因縁生

法眼淨

より因縁生にして主なし、もし能く此れを解する者はまことの道を得るなり」と。聰明なる優波底沙は、之れを聞いて忽ちに人生の迷妄を看破り、直に阿説示に導かれて竹林精舎に至り、世尊に謁して法眼淨を得たりき。喜びに滿てる彼れは、先の誓を果さんとして友なる拘利陀のもとに歸るに、拘利陀即ち優波底沙の威儀安庠として、顔容また常に異なるを見て喜び抑ふる能はず、直に佛教に歸依するの志を生ぜしかば、師なる刪舍耶の弟子と共に、竹林精舎に赴きて出家受戒し、遂に優波底沙は舍利弗と改め、拘利陀は目連と名けぬ。是に於てか、世尊の御弟子は、千二百五十人の多きに及びぬ。佛典中に此語の多きは、蓋し此れに基きしものなるべし。

然るに其中に於て、舍利弗は智慧第一と稱せられ、目連は神通第一と稱せられし程に聰明ならびなかりしかば、世尊は幾もなく此等

の二弟子に重要な地位を與へて、舍利弗を世尊左脇の弟子となし、目連を世尊右脇の弟子となしたまひぬ。されば舍利弗目連に對する世尊の寵遇の、いかばかり厚かりしかを知るべく、ために諸弟子の中には快からざる思ひを起すものも出づるに至れり。是を以て、世尊は諸弟子を集めてこれを和らげ給ひ、初めて、「諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教」といへる、七佛通誠(毘婆尸佛、尸棄佛、毘舍浮佛、拘留孫佛、俱那含牟尼佛、釋迦牟尼佛、迦葉佛)の四句の偈を教へたまひぬ。是れ即ち波羅提木叉にして、實に佛教戒律の最初なりとす。是れより、後漸次に犯戒者あるに従うて、微細なる律制を生ずるに至りぬ。

かくて舍利弗目連の入道に次いで、世尊滅後の教團を統御して三藏の結集を成ぜる、大迦葉の歸佛ありき。彼は王舍城外の寂しき村に生まれ、幼名を畢波羅耶那ビバラヤナと云ひ、妻を跋陀羅迦卑梨耶バダラカビリヤといへり。

七佛通誠偈

大迦葉の出家

頭陀行

同棲十二年の後、夫妻共に出家の志ありしかば、相別れて修道の師を求め、先に悟りの道に入れる者は、必ず後を誘うて道に入らしめんことを約しぬ。畢波羅耶那、先づ家事を棄て、山林に入らんことを、たましく世尊が竹林精舎にさぐまりて、甚深の法を説きたまふと聞き、深くその機を得たるを喜びて、世尊のもとに詣り、遂に佛弟子となりぬ。かくて、迦葉の妻は外道の教を學びしが、世尊後に女人の出家をゆるしたまふに及びて、迦葉は使を遣はしてこれを招き、波闍波提を師として、祇園精舎に入らしめぬ。迦葉は諸弟子の中に於て、頭陀行第一と稱せられ、且つ大智大徳たりし故を以て、前の三迦葉に擇びて摩訶迦葉と名けられぬ。世尊が弟子を誡しめたまふときは、常にこの大迦葉を範として慈訓を施したまひしなり。已にして、世尊鹿野苑に法輪を轉じたまひしより、王舍城竹林精

舎にこゝまりて廣く衆に説法したまふに至るまで、僅に數箇月に過ぎざれど、馳せて世尊の膝下に到るもの尠しとせず、さきに鹿野苑に五十六人を得、今また王舎城に千二百五十有餘人を得たり。而して、三迦葉を始めとして、舍利弗目連及び大迦葉の如き、有徳なる諸弟子を得たるは、僧寶の威信に大なる關係あるものにして、更に頻毘娑羅王の如き、摩伽陀國の元首たるの身を以て、先んじて佛法に歸依せる如きは、民心に大影響を及ぼせること、實に明かなりといふべきなり。

第九課 釋尊の教化（その三）

淨飯王の入信

太子出城の後ち大苦行六年の間、父君淨飯大王は常に思ひを太子に寄せて、愁ひ多き月日をつゞけたまひつゝ、かくては僅に太子に

關するたよりを集めてぞ、寂しき御心を慰め給ひける。然るに、愛しき太子は今や最勝尊となりて、王舎城に殊勝の法を説き宣へたまふと聞召し、父王及び耶輸陀羅姫の喜び云はん方なく、幾度か使を派しては迦毘羅城に歸りたまはんことを願ひぬ。恰も世尊は谷川の流れ清き靈鷲山リョウジュサンにて説法し在しけるが、父王及び姫の待ちわびたまふを聞召し、乃ち諸弟子と共に迦毘羅城に向ひて、城外なる尼俱盧陀林中に住まりたまひければ、王家の一族並に數多の城民等、世尊を訪ひまゐらせんとして、林をさして馳せあつまりぬ。

四姓

然れども四姓の差を離れ、怨親の別を認めたまはざる世尊に於ては、心中痛歎して絶望するの苦みもなく、また感激して飛舞するの喜びもなければ、久しく相別れて始めて相遇ふ父王並に王家の近親に對しても、凡常一樣の情愛を超えたまへり。されば溢るゝばかり

世尊の行乞

喜びに満てる城民も、豫期に違へる冷かなる世尊の態度に嫌らずして、些かの供養をもさゝぐることを打ち忘れ、いつしか悉く立ち去り了りぬ。

世尊、迦毘羅城に到りたまひし翌日のことなりき。朝まだきより衣を著け鉢を持ち、數多き弟子をひきゐて市城に入り、家より家へ乞食を乞ひて漸く宮城ちかく至りたまひしほごに、父王は殿上遙かに之れを聞召していたく耻ぢらひたまひ、直に馳せて街頭に見えて曰く、「御身は何故に此の如くにして我等を辱かしたまふや、家より家に食を乞ふは、御身に乞ひて缺くべからざる事なるか」と。世尊答へたまはく、「こはこれ我種族のならばしなれば、いごもふさはしき法なり」。父王また曰く、「如何がして然るべきか、御身は尊き王族の裔なり、御身の種族中にありては、何人も此の如き憐れなる姿

をなせるものはあらざりき」。世尊更に答へたまはく、父君並に諸王公子は王族の裔にてましませごも、我れは過去の諸佛の後裔に屬すれば、その制規に倣ひて斯くは爲せるなり、げに乞行は眞理に相契ひ、今生後生の功德を生ずる善き行法にして、此の常習を忽にするごはふさはしからざるなり」。かくて教の要旨を説いて言く、いつれの時を問はず、慢心を興すごもなく、快く善法を行じたまへ、善法はよく身心を安穩ならしめ、今世後世ごもに患ひなからん」と。父王之れを聞いて御心に得る所あり、即ち其鉢を執りて世尊を王宮の上殿に請じ、以て用意の食を供養したまひぬ。

姫の入信

是に於てか、王族及び群臣宮女等、皆つごひ來りて世尊を禮するに至りしが、獨り耶輸陀羅姫のみは室に籠りて衆の勸めもさかず、且つ謂へらく、「太子もし我れに一顧の愛あらば、自ら來りて我れに見

えん」ご。世尊即ち舍利弗目連を従へ、父王自ら世尊の鉢を持して王姫の室に赴きたまふに、さすがに悲喜の情抑えんかたもなく、忽ち身を世尊の足下に投じて、さめくゝと落涙したまひければ、父王乃ち王姫の爲に、常に世尊に撃げし敬愛の情をたへて曰く、「御身が鬚髪を剃るご聞くやまた自らも髪を剃り、粗衣を服すご聞くやまた粗衣を服し、一日一食ご聞くやまた一日一食し、更に御身が低小の牀を用ひ香味を廢すご聞くや、また自らも麗はしき高廣の大牀を除き香味を棄て、顧みざりき」ご。世尊、父王並に王姫に告げて言く、「げに耶輸陀羅の功德こそ誠に大いなれ、姫は今生のみならず、その前生に於ても常に自身相應の行を知り、且つ教法の恭敬にもまた嚴しき注意を以て侍せり」ご。かくて、王姫は世尊の情けぶかき教化を蒙りて法雨に浴し、後に尼僧の教團興るに及びて、出家受戒して

難陀の出家

世尊の御弟子となりたまひぬ。

翌日、世尊また尼俱盧陀林より、難陀を訪れんごて王宮に至りたまひぬ。難陀は世尊の叔母なる波闍波提の王子にして、此日は難陀のために皇太子の位に上り、宮室を頂受し、及び婚姻の三大慶福を祝ふ御宴の催あるを以て、世尊また此れに列りたまひしが、難陀をして世間の愛欲を脱れしめんごて説いて言く、「邪念を滅ぼし節操を持続して、四諦を學び涅槃を求むること、是れを宴坐ごなす」ご。かくて鉢を難陀に與へたまふに、難陀即ち美しく装ひたれど、その鉢を受け食を盛りて世尊に奉ずるに、世尊故らにこれをうけずして座より起ちて林に歸りたまへば、難陀已むごごなくて鉢を持してみあごに從ひまつりぬ。かくて、其姫たるべき孫陀羅は、髪なご結ひつゝ、ありしか、左手に黒髪を握り、右手に窓を支へて、憂ひの眼を遠く

宴坐

に放ちつゝ、聲をかぎりに呼ばひけるに、難陀は何のいらへをもえせずして、林の中にぞ入りける。是に於て、世尊は難陀のために欲不淨の旨を説いて言く、「當に知るべし、姪欲の事、樂みは少く苦みは多し、猶ほ風に逆ひて熾炬を執るが如し、愚者放たざれば必ず燒害せられん。欲は不淨なり、かの屎聚の如し。欲は薄き外皮の覆ふ所に現はる、欲は反覆すること勿れ、屎塗毒蛇の如し、欲は怨賊の如く詐りて人に親附す、欲は借りしもの、必ず當に償ふべきが如し。欲は悪むべし廁に華を生ずるが如し、欲は疥瘡の火に向ひて之れを搔けば轉た劇しきが如し、欲は狗の枯骨を噛んで、唾涎共に合して乃ち味ありごして、唇齒破れ盡くれごも厭足するを知らざる如し。欲は渴したる人の鹹水を飲みていよく、その渴を増すが如し、欲は衆鳥の段肉を競ひ争ふが如く、欲は魚獸の味を貪りて死に至るが如

し、その患はなほ大なり」と。峻烈肌を刺すが如き世尊の説法には、難陀の燃ゆるが如き愛著の念も、自ら夢の覺めたるが如くにて、遂に世尊の下に梵行を修することゝはなりぬ。

羅睺羅の出家

世尊迦毘羅城に來りたまひしより七日を過ぎて、耶輸陀羅姫は羅睺羅王子と共に高樓にありしが、遙かに宮中に入りたまふ世尊の御姿を指して曰く、「御身はかの華々しき御顔の沙門を見るや否や、彼の沙門こそ御身が父君にておはすなり、往いてその餘財を求めたまへ」と。既にして世尊宮中に入りて中庭の露地に坐したまふに、王子は即ち高樓より馳せ下りて世尊の影の中に立ちて曰く、「この影はなほだ樂し、願くば父上遺産を賜へかし」と。されど世尊はかゝる願ひを喜ばしごも、また煩はしごも思召さずして、平然として其場を去りたまへば、羅睺羅またかく呼ばひつゝ、後へに従ひて林に到りぬ。即ち

沙彌

世尊自ら思ひたまはく、「羅睺羅が求むる所は、滅ぶるものなれば苦惱を免れず、寧ろ滅びざるものこそまことの遺産なれば、我れ曾て菩提樹下にあつめ得たる法の寶をこそ分ち與ふべけれ」とて、目連をして剃髮せしめ、舍利弗を和上ワシヤウとして沙彌シヤミとなしたまひぬ。これ教團に於ける沙彌の最初にして、大迦葉は依止師エシとして、この新しき僧位なる沙彌の務めを教へまつりぬ。今日受戒の際に臨みて、「父母聽すや否や」と問ふは、律に「父母聽さざれば出家受戒するを得ざれ」との制に出づるものにして。此は是れ老いませる淨飯大王が、杖も柱もたのみし太子の出家に長き悲みを嘗め、今また儲君と定めし難陀及び羅睺羅の出家するに遇ひ、兒孫の愛骨髓に徹して悲痛云ふべからず、即ちかゝる苦みを子を持つ親に與ふるに忍びずとて、世尊に願ひ出でたまひしに因るものにして、この僅なる制戒の中にも、大王の

祇園精舎の建立

ふかき悲歎とあつき慈悲との籠れるを知るべきなり。かくて、世尊迦毘羅城に留まること三箇月、阿那律アナラツ、金毘羅キンピラ、跋提バツタイ、阿難陀アナンダ、提婆達多テイバツダ等の諸王子の出家する者多かりしが、淨飯大王は其間に於て、世尊並に諸弟子の看護の下に命終したまひぬ。

宿縁

かくて世尊は迦毘羅城より、再び王舎城に還りたまひき。時に阿那他アナヘ擯荼揭ヒンダケツ、即ち給孤獨キッコツと呼ばれし富商須達多スダタが、五百の大車を率ゐて舍衛城より王舎城に來り、常の如くに親しき友の家に宿りけるに、友の動靜甚だ平生に異なるものありしかば、之れを怪しみ問ふに、友のいへらく、「明朝、世尊及び衆僧を迎へんとて、その準備に忙がはしきなり」と。宿縁深厚なる須達多は、友より悉達多太子の出家成道して今正に尊き佛陀ブツとならせたまへりと聞くや、直に世尊に謁せんこの思ひに堪へず、あくるあさまだきに世尊を訪ひまつりしに、世尊

は此れを迎へて「來れ須達多」と宣ふに、立ちどころに歸依の信を決定して命終までも世尊に従ひまゐらせんこの意を起しぬ。須達多乃ち明日を以て、衆僧と共に供養を受けたまはんことを請ひ、且つ舍衛城に遊化せられんことを願ひしに、世尊默念としてこれをゆるしたまひぬ。是に於てか、彼れは舍衛城の逝多王子に屬せし逝多林をあがなひて、世尊及び衆僧止住の處となし、別に莊麗なる伽藍を建て、世尊に施しまつりぬ。是れぞ名高き祇園精舎にして、精舎の建設は、凡て世尊の意を承けて舍利弗の都督せし所にして、世尊の在世には十六大院あり、院毎に六十房ありしと傳へらるゝを以て見るに、いかに宏壯なりしかを想見すべく、後年世尊が最も多く此處に住まりたまひしは、一は波斯匿王並に城民の歸依厚きによるごはいへ、一は大衆の止住に適せるに由るが故なりしなり。

第十課 釋尊の教化（その四）

凡そ世尊成道後に於ける、教化の事蹟は頗る多しと雖、年序を追うて之れをしるすこと甚だ難し。これを基督の傳に比するに、彼れは傳道中の事蹟明かにして、その以前は殆ど明かならざれども、此れは成道以前は明かにして、その以後は概して明かならざるなり。是れ蓋し、一は記録の有無によるご、一はその時日の長短に因るものにして、彼れは僅に三年なるに、此れは四十五年の長きに及べるを以て、其間には平穩に過したまひて、傳ふるほごに著しき事蹟もなかりしなるべし。されば四十五年の久しき間に於て、最も著しき事蹟のつゞきしは、成道後僅に數年の間に於て、一代化導の基礎は全く茲に定まりしかば、其後に至りては、平穩なる遊行によりて其教

を擴めたまひしなり。されば上に述べたる事蹟の如きは、成道後兩三年の間の事にして、それより二十四年に至る間は、或は四重禁制戒、阿難の出家、比丘尼の入團、或は鶯^{イン}唄^{ウタ}利^リ摩^マ羅^ラの歸佛等、微かに年序を追うて、尋ね得ざるにあらざるも、而も極めて不確實にして、到底信賴するを得ざるなり。更に第二十五年より涅槃近くに至る二十年の間は悉く不明にして、佛傳及び律典に存するものは、皆成道後數年間の事蹟と、涅槃近くの状況とのみなれば、佛傳の研究者によりては、甚だ遺憾なりと云はざるべからず。されば吾人はこの空隙に對する遺憾の念を抱きつゝ、涅槃近き教化の事蹟を尋ねんことはするなり。

惟ふに、祇園精舎の建立は、佛教興隆の一大基礎を確立せるものにして、世尊は之れよりしばし王舎城と舍衛城との間をゆき、し

たまふのみならず、迦毘羅、婆羅奈斯、憍賞彌、吠舍離等の諸處に遊行したまひしかど、中にも舍衛城祇園精舎に住まりたまふこと最も多かりき。かくて妬みぶかさ外道婆羅門等の爲めに、幾多の誹謗或は迫害のことがありしも、概ね平穩に過ごしたまひて、靜かに化を垂れたまひしなり。

提婆の獨立

然るに、世尊成道したまひてより二十八年にして、俄然、教團の中に大破綻を生じぬ。即ち、世尊曾て憍賞彌城に安居したまふや、城民來りて尊重供養するもの甚だ多く、舍利弗、目連、阿那律、金毘羅等また厚く供養せられたれども、獨り提婆達多のみは一顧をも與へられざりき。提婆、心に思へらく、「我れ王族に生まれて世尊の從弟たり、且つ解行また他に劣らざるに獨り輕しめらる、何そ此に堪ふるを得んや」と。即ち世尊の教團を離れて獨り王舎城に赴き、頻毘

娑羅王の太子阿闍世アジャタケトの優遇を受けて、伽耶山上に新しき精舎を建てぬ。翌年、世尊は竹林精舎に歸りて雨期を過し給ふや、自ら僧團を承け自立の教條によりて此れを統理せんことを願ひしか、世尊斥けて言く、「舍利弗目連の徳を以て尙ほ之れを領せしめず、いかに況んや、汝の如きに於てをや」と。是に於て提婆憤怒の情おさへがたく、遂に獨立の教團を組織せんとして、世尊に對し曾て不平の念を懷ける五百の弟子を率ゐて別衆を成じ、且つ阿闍世太子と謀りて父王を殺さしめんとして七重の牢獄に幽閉して餓死せしめ、自ら世尊を殺さんとして謀を設くること三たび、たゞ佛身より血を出せるのみにして事成らざりき。然れども資性豪邁なる彼れは、些かも屈することなく、更に五ヶ條の嚴規を制して、世尊に對立せんことを企てぬ。嚴規とは、一に盡形壽樹下坐、二に盡形壽糞掃衣、三盡形壽乞食、四に盡形壽不食

酥鹽、五に盡形壽不食肉にして、彼れは世尊の律制を以て、甚だ寛に失せりと思ひしなり。而して彼が威容言動は、頗る世尊に類するものあり、加ふるに阿闍世王の供養ありし爲めに、諸弟子の中には世尊の教團を去りて、此れに歸するもの甚だ多かりき。

されど世尊はこれらの嚴規に對し、諸弟子に訓へて言く、「若し守らんご欲する者は守るを妨げず、されど必須のものにはあらざるなり。幼者または弱者には、守り得ざるものもあるべし。食物の如きは地方の風習に従うて、惑溺に陥入らざる限りは自由なるべく、樹下に在りごも房舎に居すごも、糞掃衣なりごも供養施衣なりごも、肉食するもせざるも、酥鹽を用ふるも用ひざるも、垢濁を離るゝに何の關する所かある。一律を以て凡てを規するは、却て正道涅槃に妨げあるべし」と。緩やかなるが如き訓誨の中に、大道の威嚴と深き慈愛と

の、籠々として満てるを推すべく、いかに背師自立の諸弟子なりと雖、自ら慚愧の念に堪へざるものもありしなるべし。加之、舍利弗また懇に五百の諸弟子に諭す所ありしを以て、一時隆盛たりし提婆の新教團も、遂に滅ぶるの已むなきに至りぬ。而して經典の中に、生きながら地獄に墮在せりと言ける如きは、是れ正しく提婆が信念上の動搖を、表示せるものに外ならざるなり。

此より先き、提婆の誘惑によりて父王を弑せる阿闍世王は、その最後の状況を追懐して後悔憂悶の情に堪へず、ために當時の碩徳に就いて問答する所ありしも未だ安らかならず、遂に耆婆の導きによりて世尊を訪ねまつり、其罪を懺悔して無根の信を得たりき。王の母君なる韋提希夫人また牢獄に幽閉せられて、悲哀憂愁の思ひに沈みつゝありしも、世尊の誘化によりて平安の喜びを得たまひぬ。淨

佛阿闍世王の歸

土の觀無量壽經は、まさにこの悲みによりて興れるものなり。

第十一課 釋尊の入滅

これより數年を経て、世尊は第四十四年の雨期を、祇園精舎に送りて後、王舎城耆闍崛山の精舎にこゝまりたまひぬ。それより吠舍離城附近の竹芳邑村に至り、第四十五年の雨期を送りたまひしに、劇しき疾にかゝりたまひしかば、世尊は阿難に向ひて將に入滅の遠からざるべきを知らせたまひぬ。此時、竹芳邑の地饑饉にして、僧食えがたかりしかば、諸弟子を吠舍離に遣はして、その知れる所の家に安居せしめ、自らは阿難と共に此處に安居し給ひしなり。

安居

されば阿難は世尊の告命を聞くや、憂愁の思ひに堪へずして、衆に教令したまはんことを請ふ。世尊言く、「阿難、僧衆は尙ほ何事を求

むるや、我れ教法を宣ふるに、内外の別をなさざりき。阿難、何人か衆僧をして、我れに従はしめんとするや。阿難、我れは衆を支へんとするものにあらず、豈に衆に於て教令あるべけんや。阿難、我れは今や衰へぬ、年當に八十なり。阿難、汝は汝自身の燈火たれ、汝自身の庇廕たれ、他の庇廕を求むる勿れ。阿難、我れ滅度の後に於て、己れ自身の燈火たり己れ自身の庇廕たり而して他の庇廕を求めざるもの、正法を以てその光輝及びその庇廕たらしめ而して他の庇廕を求めざるもの、之れを眞の我弟子となす」と。

自燈明

法燈明

世尊の遺教

かくて世尊は阿難を伴ひて、吠舍離城に入りて乞食し、夜に入りて衆僧を召びて言く、「汝達比丘よ、已に宣揚せる教旨を學修し相續せよ、かくして人民に喜悅となり、世界に慈悲なるを期すべし。我年極まれり、今より三箇月にして入滅せん。汝達比丘よ、嚴肅な

れ、聰慧なれ、清淨なれ、決定して確乎たれ、己れ自身の心を誠しめよ、懈怠なくこの法と律とを遵奉せば、生死の海を渡りて苦を滅するを得ん」と。諸比丘は世尊の遺教を聞いて、皆愕然として色を失ひ、大に叫んで曰く、「佛の滅度したまふこと何ぞ早き、世間の眼滅すること一に何ぞ痛ましき」と。世尊告げて言く、「止めよ、憂ふる勿れ、世に生まれて終らざるものなし。我れ已に恩愛の無常なること、會ふ者の離るること、身は己が有にあらず、命は久しく存せざるの旨を説けるにはあらずや」と。

かくて世尊再び吠舍離城に入りて、最後の行乞をなしたまひ、ついで衆多の弟子をひきゐて、拘尸城に赴かんとして波婆城に達したまふや、暫く市中の金工純陀が所有なる林に憩ひたまふに、純陀よろこびて、世尊及び衆僧を供養し、別に梅檀樹の耳を以て獨り世尊に奉

りぬ。これより病漸く重らせたまへごも、勤めて痛みを忍びつゝ立ち出でたまひしが、中路一樹の下に止まり、阿難に告げてのたまはく、「我れ背の痛みを患ふ、汝速かに座を敷くべし」とて、純陀が最後の供養に大果報あるべしなど語らひつゝ、しばし憩はせたまひぬ。已にして少しく歩ませたまひては、また樹蔭に憩ひたまふに、時に至れる拘尸城の弗迦奢を化して、優婆塞となしたまひぬ。かくて跋提河に達しけるに、渴を覺ゆること甚しく、阿難をして水を汲ましむるに氣力や、復したまひしかば、河に入りて浴し、しばし憩ひてのち跋提河を渡り、日暮るゝころ娑羅林に到りたまひぬ。世尊、阿難に告げて言く、「阿難、吾れ疲れたり、吾れ臥せんと欲す、速に娑羅雙樹の間に床をしつらひて、頭北面西ならしめよ」と。世尊即ち床に臥し、しづかに阿難を顧みて言く、「我れ自ら憶念するに、曾て

有

最後の弟子

轉輪聖王たりしこと六たび、常に骨を此處に置けり。今我れ無上正覺を成じて、また身をこゝに捨て、今より後永く生死を斷ずべし、此は是れ最後の生にして此後更に有を受けざるべし」と。阿難即ち一比丘と共に拘尸城に入りて、涙ながらに世尊夜半入滅したまふべしと告ぐるに、城民の驚き譬へんにもなく、相共に世尊のまごに詣で、永き別離を歎ちつゝ、最後の聞法供養の誠を拏げまつりぬ。時に須跋陀羅といへる婆羅門あり、曾て世尊の教を聞きて、や、佛教に歸したりしも、尙ほ外道を奉じてためらふところありしが、世尊の將に涅槃したまはんとするを聞いて、急ぎ娑羅樹林に至り、阿難に願うて曰く、「我れ平生疑ひの釋けざるものありて困しむこと久し、希くば世尊に見えて教を請はん」と。阿難は世尊が長き論難に耐へたまはざらんを恐れて、彼れを斥けんせしも、世尊之れを許し

四沙門果

六十四

て近寄らしめて言く、「我法の中に八聖道あり、四沙門果あり、外道異學には沙門果なし。我れ、年二十九にして出家善道を求め、成道して四十五年、戒定慧の三學獨處に行じて、至上なる聖道を求め、今、法要を説く、此外に沙門果なし」と。長かりし須跋陀羅の疑ひも、こゝに氷解して歡喜云ふべからず、世尊また外道四月檢證の法を廢して、直に受戒入團をゆるしたまひぬ。是れを即ち世尊最後の弟子となすなり。

外道四月試住

時に阿難、世尊の背後にありて、牀を撫で、悲泣すらく、「世尊滅度したまふこと何ぞはやきや、我れ佛恩を蒙りて學地にあるも、所業未だ成らず、今より誰れを師とし、誰れのために鉢と衣とを撃げん」と。世尊、阿難を召びて言く、「汝憂ふる勿れ、吾れ曾て謂ひしにあらずや、いづれのものも無常の性なれば、不滅のものにてはなきぞかし。

梵檀罰

阿難、汝は長き歲月の間、誠をこめて奉事を果しぬ。必ず望みを達するもやがてのことなるべし、唯よく一心に精進せよかし」と。阿難即ち世尊にまうさく、「世尊世に在す間は、四方の長老來りて見ゆるを以て、此れを禮敬するを得しも、世尊入滅したまはゞまた來るものなけん」と。世尊言く、「憂ふる勿れ、かれらは我が誕生、得道、説法、涅槃の處を憶念して忘れず、必ず來りて塔寺を禮敬せん」と。又言く、「異學外道來りて出家を求めなば、悉く之れを許して具足戒を授くべし、四月試住せしむること勿れ」と。また阿難、闍那比丘アヤシナを如何にすべきかを問ふに、世尊言く、「彼れ若し威儀に順はず、教誡を受けざらんには、梵檀罰ボンダンを加へて、共に語り、共に往復し、共に法事をなすべからず」と。かくて、最後に阿難に告げて言く、「汝、我が入滅せるを見て、正法永く絶ゆべしと思ふこと勿れ、我れもろくの

最後の教誨

比丘のために、戒を制し、また種々の妙法を説きぬ。この法と戒こそそは、正に汝が師にして、わが在世と異ならざるべけん」と。已にして世尊また諸比丘に言く、「一切諸行は悉く無常なり、生死極めて怖るべし、汝達勤行精進して速に解脱を求むべし、此は是れ我が最後の教なり」と。

かくて、世尊は初夜に弗迦奢を導き、中夜に異教者須跋陀羅を教化し、後夜に諸比丘を教へたまひ、遂に二月十五日(西紀前五四三)夜も未明の頃、端然として娑羅林中に入滅したまひぬ。阿難涙に咽びつゝ、漸く阿那律に勵まされて、來集の諸弟子と共に供養し、林間に奉安するこそ七日、迦葉尊者の來會を待たて、城の北門より出で跋提河を渡りて、ねんごろに荼毘しまつりぬ。御遺骨は世尊の教化を蒙りし諸國王の願ひによりて八分し、おの／＼佛塔をたて、供養恭敬を

つくしまつりぬ。

あゝ山に入りて山を出で、林に入りて林を出で、靜かに修し靜かに觀じ、化導しばらくも止むこそなかりし世尊の御一生こそ、げに我等が最後の理想ともいふべけれ。而して吾等は、世尊が阿難に告げたまひし最後の教誨に、「法と戒とは汝が師なり」と宣ひし教に力を得て、今や更に、世尊所説の法と戒とは如何なるものなるかこの問題に、進み入らんとはするなり。

第二編 教法之部

第十一課 遺跡崇拜 (滅後の世尊)

四十五年の化縁は決して短きにあらざるも、世尊は遂に娑羅林中に會者定離のことはりを現はしたまひぬ。子の親を慕ふが如くに、朝に夕に慕ひまつりし現身の世尊をうしなひし遺弟は、暗に明を失ひ津に船を逸せるが如くに、ある者は天に哭し或る者は胸をうちてぞ悲嘆の涙にかきくれける。

復活
舍利

されば一たび失へるものは永劫に還るべくもあらざれば、基督の如き色身の復活はつひに望むべからず。されば常の人の世にありても、子は三年亡き父の道を改めず、架上の殘藥、篋中の故衣なほ其人を偲ぶが如く、世尊滅後の遺弟は、まづ在世のころを想ひ起さんとして、遺身佛牙の舍利を崇めては寂しき心を慰めけり。かくて

舍利を生身佛陀に代るべき第二の佛陀として崇むるに共に、石鉢、袈裟、錫杖等の遺物を敬ひ、更に降誕、成道、轉法輪、入涅槃の四處を靈場として禮拜するに至りぬ。經の中に塔像を起し、舍利を供養し、遺物遺跡を崇むる功德を以て生天の因と説けるは、是れ恐くは世尊を追慕するの至情を示せるものに外ならざるなり。

されど世尊を遺物に偲び、遺跡に慕ふは、もこそは生身佛陀の餘影に過ぎざるものにして、活ける世尊の音容はその入滅と共に消えにしものなれば、いかに舍衛靈山の荒墟に追想の涙に咽ぶとも、以て衆生救済の智力とは成り難かりき。此に於てか此等の禮拜と共に、遺弟が追懷は世尊の證悟と教化に向ひて、こゝに佛傳の理想化を望むに至り、思ひを遠く佛前佛後に馳せて過去佛となり、未來佛となり、本生譚となり、菩薩となり、更に法身佛となり、次いで三世

佛傳の理想化

十方の諸佛となりて、一步は一步より功德超勝の佛陀を求るに及んでは、積みて五千餘卷の經典となり、遂に錯綜せる今日の佛教々理を成ずるに至りぬ。

第十三課 過去佛

佛門に入りし人々にして、いかなる人も知らざるなき過去七佛の形式は、げに世尊滅後の遺弟が、そのやるせなき追慕の至情を、過去に偲びて表現せられしものなり。

七佛は過去莊嚴劫の終りに出で給ひし毘婆尸佛、尸棄佛、毘舍浮佛の三佛と、現在賢劫の初めに出現せる拘樓孫佛、拘那含牟尼佛、迦葉佛、及び釋迦牟尼佛の四佛との總稱にして、此等の諸佛は番々出世したまひて前佛の法燈を繼ぎ、以て世間の冥闇を照すと傳へら

七佛

れぬ。

抑々、此等の過去佛は、釋尊自ら説き示し給ひしものにあらずして、滅後の遺弟によりて成ぜるものなることは、七佛の中に現在佛なる釋尊を加ふるに見て明かなるべく、且又、降神託胎等の八相成道(釋尊、降神、降生、出家、成道、說法、涅槃)の形式の同一に見るに、現在釋迦牟尼佛傳の縮寫を過去に及ぼせるに過ぎざるに見ても明かなるものなり。

さはれ、此等の七佛を列ぬるに至りし源は、已に世尊の説法の中に含まれたりしに相違なかるべし、蓋し、世尊は師の授けに依らず、専ら靜かに觀じて得たまへる自覺なれども、その證悟の大道は、古今に通じ、中外に施して到らざるなき平等一乘の法なれば、自ら證りたまひしが如くに、先にも自ら證れる人あるべしとは考へらるゝ所なるべし。されば經の中にも、「我得古仙人道、古仙人逕、古仙人道

八相成道

一乘

賢劫四佛

授記

跡と説き、或は賢劫四佛を四大仙人といひ、或は世尊を大仙と稱し奉りしが如きに見るも、過去佛の原型は恐くは古仙人のここなるべく、以て世尊證悟の先驅をなせる多くの聖賢の、世に存したまひし事を示せるものなるべし。

而して、過去二十四佛、過去百四十三佛と説き、無量壽經に五十三佛を列ね、佛名經に千佛名を記せる如きは、明かに七佛思想の上に添へられたるものにして、實際に尊ばれしは、世尊以前の過去の六佛なりしなり、特に賢劫四佛はその遺骨地を傳へらるゝ程にして、中にも迦葉佛は最も崇められしと傳へらる。されど過去佛はいかに尊ばるごも、他佛の本生の授記佛たるに止まるものにして、その誓願の保證に立ち、その功德を増進せしめ、その本願の理想を示すのみなれば、自ら誓願を起し功德を植うるものにあらざるなり。され

ば三世諸佛の一として敬へども、獨立に信賴の對象となりたまふことなく、たごひ經論に七佛讚歎の偈文ありとも、唯これ儀式の一端を表はせるに過ぎざるものなり。

要するに過去佛の起因は、世尊證悟の確信とその永遠を示し、後に理想的佛傳の材料を以て、着色せるものに過ぎずといふべきなり

第十四課 未 來 佛

過去佛の形式は、世尊の自覺に基きて、遺弟の追懷を表はせるものなれど、未來佛はその覺他に基きて、遺弟が前途に對する洋々たる希望によりて起れる形式なり。而して經の中には未來佛として、慈氏、師子焰、柔仁、妙華、善星宿、道師、大豐多、大力等の諸佛名を列ぬるも、就中、最も原始的にして且つ有名なるは、慈氏即ち

彌勒佛

彌勒佛なりとす。

抑々、彌勒とは漢音に梅怛麗樂といひ、無能勝と義譯せられ、其意は慈愛ある者との義なれば、古より慈氏と稱せらる。或は未來佛となり給ふ前に、慈定を習ひ、國民を慈育せられし爲に、國人みな慈氏と稱せりと。

漏盡
無餘涅槃

而して何故に慈愛を名とせる彌勒を佛として、未來に豫期するの必要ありしか。惟ふに、漏盡の世尊一たび無餘涅槃に入りたまふや、碎身の舍利を留むる外は、再び生を此世に現はしたまふに由なく、たごひ迦葉の會葬に佛足より光明を現じたまひしとするも、現身荼毘し終れば、既に再現の望みは絶え果てぬ。さりさて佛陀追慕の念は切々として去る能はず。茲に於てか如來世に在しまさは、百千里を遠しとせずして問訊すべしとの至情は、轉じて新佛の出現に是れ

如來

を待つこと、寧ろ捷徑なりと信じ、以て其教化に浴せんこの希望を生ずるに至りぬ。而して過去佛の原型が、既に世尊の直説の中に含まれありしとせば、平等一乗の道理により、未來佛も同時に世尊の直説に基くものあるべきは明かなりといふべし。

而して、彌勒はもと舍利弗目連と等しく佛弟子たりしも、命終のち兜率天の内宮に住し、五十六億七千萬年の後に、再び此世に下降し來り、釋尊に次ぎて佛となり有縁の衆生を濟度したまへば、一生補處の菩薩とも、又未來佛とも申し奉るなり。されど佛弟子としての彌勒と、未來佛としての彌勒とは、何等の關係を有したるものにあらずして、たゞ一切衆生を救ひたまふ慈悲の菩薩として、之れを崇むるに至りしものなり。

その娑婆出現の模様に至りては、多くは過去佛の八相と同じくし

一生補處

魔

て、たゞ時と處と人とを異にせる佛傳の縮寫に過ぎざるなり。但し託胎・出家・成道・説法・涅槃の相は悉く佛傳と同じきも、降魔相に至りては、世尊のときにはその成道を妨げたるに、慈尊の時は却つて歡喜の色を現じ、八萬四千の天子を率ゐて、説法の會座に集まり法化を助くこと記し、また梵天勸請の事を缺けり。これ一は彌勒出現の時は、人々利根にして、其土またすぐるゝ故に、魔の妨げあるは國土の善美なるに適せざるを以て除けるものなるべく、一は世尊が既に降魔し終りたる後なれば、唯その遺法の繼紹と維持との豫想を含みて描かれし佛傳の理想化なる故に、降魔と勸請とを要せざりしものなるべし。

而して未來佛としての彌勒は、單に教法に關係あるのみならず、もと入滅の世尊に代るべき、活きたる佛陀の再現を望むの情に出で

龍華樹

しを以て、自ら現生の善因によりて、遠き未來には彌勒佛に値ひたてまつらんとの信仰を、生ずるに至るは當然のこゝなれば、過去佛に比して、濟度衆生の信仰の一層厚きもの存す。蓋し、釋尊入滅し給ひ、高弟相次いで涅槃に入り、轉た夕陽落寞の感に打たるゝの時、補處の彌勒はやがて下生して、龍華樹の下に成佛したまふべしとの信仰は、いかに絶望せる遺弟に一すぢの希望と慰安とを與へしかは想ひ見るに足るべく、かくて、又直ちに聞法結縁の信仰を生ずるは當然にして、永劫の末なる彌勒の下生をまたず、來世直ちに兜率天に上天せんとの兜率上生の思想と變じぬ。これ慈尊出現の時期遙遠なるため、值佛聞法を急ぐの情より出でしものなり。遺弟の至情また無理からずといふべきなり。

兜率上生

第十五課 本 生 譚

佛教經典に親むものは、いたるところに譬喩因縁等の、面白き説話の多く含まれたるに驚くべし。これ實に世尊の教化が、理論よりも實行につとめ、いたづらに智解多からんよりも、少解を以て行ひの本を確立するを要させる故に、簡明なる説法の中に、譬喩因縁或は古譚の何れかを以て、やすく解領せしめたまひしに由るなり。

而して印度の人々は、甚だ豊かなる思想を有すると共に、非凡なる獨創の力に富みたるを以て、その雄大豊富なる構想はこゝに諸種の談叢を生じ、遂に本生譚のこゝき興趣ある形式を生ずるに至りぬ。抑々、寓話古譚は何れの國にありても上下一般に流布し、幼き童子も能く之れを聞くを以て、その國民と密接なる關係を有せり。そ

の思想や單純なりと雖、之れを聞くや歡樂盡きざるもの存す。世尊がごりて説法の譬ごなし補ひごなしたまひしは、多くはこれらの古譚に依れるものにして、誠にその利用よろしきを得たるものと云ふべく、殊に無智なる俗人の教化には、いかばかり利便多かりしかは推するに難からざるべし。

本生譚は初めこれらの寓話より生じ、世尊また之れを應用し給ひたるも、滅後の遺弟は、此に依りて更に世尊を悠久なる存在の證ごなすに至り、今日の世尊の威徳は過去幾百千の生の間、慈悲を垂れ、布施を行じて、深厚なる智徳を積みたまひしに由るなりと爲し、更に本生のながき經歷ご化他の誓願ごを合せ結びて、茲に菩薩なる思想を生ずるに至りぬ。

今、本生經に顯はさる、世尊の本生受身を見るに、仙人ごして八

化他の誓願

幽鬼

十三回、國王ごして八十五回、婆羅門ごして二十四回、乃至貴人ごなり、學者ごなり、或は大工ごなり、盜賊ごなり、或は漂泊者ごなり、學生ごなる等、凡そ人類の生を受けたまひしご三百五十餘たび、更に獼猴ごして十八回、鹿ごして十一回、獅子ごして十回、鶯鳥ごして八回、或は象ごして六回、犬ごしての一回等、畜類の生を受けたまひしご百餘たび、尙ほ梵天、幽鬼、樹神ごして四十八回の生を受け、以て有縁の衆生を濟度したまへりごしるせり。これ即ち、世尊を本生受身の説話によりて、事實上に悠久の存在なるを證し、佛陀の補處たる菩薩の名を假りて、久遠劫來の覺者たるべき思想をふくめるものなれば、極めて重要なものごいふべきなり。されば表面は實に神話古譚に覆はるゝごも、その裏面を觀ずれば、果位の世尊を因位の所に置きて、自利々他の二行なる限り無き智慧ご限り

小乘經典
大乘經典

なき慈悲なる六度の行と、更に久遠の思想を本として生ぜるものなり。而して、小乘經典たるは大乘經典たるを問はず、その中心の思想は、常に本生譚の中に寓して説かれたるに見るも、いかに重要なるかを知るべし。

されば、廣大なる佛教は一に本生譚に依るところ多く、その起源や甚だ古く、その關係たるや誠に廣しといふべきなり。

第十六課 菩薩

三乘

菩薩とは普通に聲聞、緣覺、菩薩の三乘として併び稱せらるゝものにして、聲聞とは世尊の尊き音容に接して、親しく四諦の法を聽受して阿羅漢の果を開くものを云ひ、緣覺とは世尊成道の際に、思惟したまへる靜觀を慕ひ、教團を離れ山林に獨居し、十二因縁の觀

所知の境
大菩提心

法を修して僻支佛の果を開かんとするものなり。而して、菩薩とは聲聞の如くに世尊所説の言教のみを重んぜず、又緣覺の如くに無視せず、靜かに聽受し、靜かに觀じて、釋尊の内的人格なる所知の境を憶念せるものなり。その所知の境とは、無限の智慧と慈悲とにして、この境を求むる心を大菩提心と名け、この心より自利々他の大行なる六度の行を修する者を菩薩と云ひ、以て圓滿なる佛果を開かんとするものなり。もごより斯かる三乗の分ちには、後世の佛徒が作れるものにして、始めは世尊も五比丘等と共に阿羅漢と稱せられ、次に世尊は無師獨覺の師主なる故に、諸弟子と區別せんとして僻支佛と稱せられ、更に世尊は自利々他圓滿の法王にて在しませば、自利を主とする阿羅漢、僻支佛にては満たざる所あるを以て、遂にその果位を佛陀又は如來と稱し、その因位を菩薩と稱し奉るに至りぬ。

解脱と輪廻

抑々、本生譚の中には、ながき經歷と誓願との二種の思想を存す。その經歷すなはち宿業の善悪いかによりて、解脱と輪廻との別を生ずるなり。而して一切衆生には皆本生あれど、未だ輪廻の境(地獄、畜生、修羅、人間、天上の六道)を解脱せんとの強き誓願はなかりき。然るに世尊の長き本生の經歷は、衆生の如くに同じく輪廻を重ねたまひつゝ、しかも輪廻を悲みたまふことなかりき。これ一に最初の誓願の力、即ち偉大なる化他救済の慈悲心に因るものにして、多生曠劫の輪廻を重ねつゝ成就したまひし難行も、全くこの強き誓願に由りしなり。されば聲聞緣覺は自利に急にして利他の大心なきに反し、世尊の本生には自利々他ごもに修したまへる故に、圓滿なる佛果を聞きたまひしなり。従つて世尊の本生をば、聲聞緣覺の名を以てせずして、常に菩薩の名を以て呼びまつりぬ。げに菩薩と呼びし最初は、世尊の本

願行

生に始まる。されば本生譚は菩薩を離れず、菩薩には必ず本生の願行を具するなり。

今、本生因位の菩薩を見るに、皆願行を具せり。(法藏菩薩の如し)これを別願といひ、又は宿願ごも殊勝の願ごも稱す。さらばその本生の誓願ごはいかんごいふに、或は當來出家の發願、值遇諸佛の發願、或は不墮惡趣の發願、生天善趣の發願、或は隨意聞法の發願、供養諸佛の發願、或は六情完具の發願、飲食充滿の發願等、凡そ衆生無量なれば、その志願また無量なる故に、本生因位の菩薩の發願も亦無量なるべし。かくて菩薩は衆生の生活ごその心靈ごを共に救はんごて、四弘誓願(衆生無邊誓願度、煩惱無盡誓願斷、六度の行)と六度の行(布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧)ごを具するに至れり。

四弘誓願
六度

而して聲聞、緣覺、菩薩の三乘は、何れも菩提を得て證果を開く

は同一なれども、菩薩の語の中には、他の二乗と異りて、覺他の義強く、化他なしには菩薩の資格を満さざるものこそせり。されば、菩薩の語は、菩提薩埵(覺有情、道衆生)の略稱にして、覺有情の義なれば、正しく一切智を求むる人の義なれど、世尊を阿羅漢又は僻支佛たるに終らしむるを得ずして、その成道は人類の爲めなりとし、降誕等の八相成道もまた化他の爲めなりと解せらるゝに至りては、その因位本生の菩薩にもまた覺他の義を含ましむるに至り、遂に上求菩提下化衆生の、自覺々他二利成滿を以て、菩薩の義となすに至りぬ。

かくて、世尊在世の弟子は羅漢と呼ばれ、文殊、普賢、觀音、地藏等の如き、在世の時に關係するところ薄きものは菩薩と稱せられ、或は教法を人格化せるあり、或は日光、月光、山嶽、花水等の自然を人格化して菩薩とせるあり、更に後世に至りて、龍樹、天親等の

大徳碩學をも、多くは菩薩として崇めらるゝに至りぬ。

第十七課 教 法

世尊の温容永く隠れて、鷲峰の嵐獨り吟じ、慈尊の聖影未だ出でずして、龍華三會の曉尙ほ遙かなり。惟ふに、母子相別るゝ億世、今一たび會ふことを得て、暫くにして復た別る。子は愁ひの涙を拭ひつゝ、親を四方に求むるは、正に滅後に於ける遺弟の心情なりき。されば逝きたまひし世尊を、遺跡遺物に拜しては、そのやるせなき悲しみを慰め、或は過去佛に偲び、未來佛に望み、或は本生譚に眺め、菩薩に慕ひ、神話を假り、古譚に基き、かくて能ふ限りに現身世尊を理想化しまつりぬ。さはれ遺弟の心情は、尙ほ未だ満だざりき。此等の内外一切の努力苦心は、佛現在したまふとの信念に達す

るには、未だ遠しと感ぜざるを得ざりき。かくてその強き思慕は、遂に世尊が遺したまひし教法に着眼し、これを想ひ起して厚く崇むるに至りぬ。

抑々、世尊直説の教法とは如何なるものなりしか。今日現存の一切經は大小乗の經律論を合せて、五千有餘卷(五千七百餘卷)の多きに達すれども、此等は幾度かの結集によりて成立せるもの、而も其が成文經典となりしは、世尊滅後三百年頃より四五百年の間にあるものにして、その以前は暗誦によりて師資相傳して持たれしものなり。されば世尊金口の説法も、年を涉り日を涉るにつれて、その懐かしき温容も次第に薄らぐに至るや、世のうつりかはりも、人の優劣によりて、相傳の上に變遷を生ずるの已むなきに至り、ために金口の教法も潤色せられ、擴大せられ、従つて遺弟の間に異なる考を生じて

結集

菩薩佛教
聲聞佛教大乘律
小乘律

相争ふに至り、遂に同一遺弟の中に於て、大乘教と小乗教、即ち菩薩佛教と聲聞佛教との差別を生ずるに至れるなり。かくて小乗教(小乗の語は大乘教徒より名けしものにして、小乗家の甘受せし所にあらず)の中に於ても、意見の相違まらくなりしかば、前後四回の結集を成じて此れを統一し、茲に小乗三藏の成文經典は編成されぬ。而して大乘經典は、小乗經典の如くに數百の大阿羅漢あつまりて作りしものにはあらで、寧ろ小數の高徳合會して、そが甚深の三昧中に浮びし世尊、即ち世尊の甚深なる所知の法を、詩の如き麗はしき筆によりて現はせるものにして、結集といはんよりは、寧ろ個人の著述とも云ふべきものなり。

既にして、大乘律が小乗律を基本とせる如く、大乘經も亦小乗經を基本とせり。而して、小乗經も種々の擴大せられしものなれば、その最も原始的なるもの、即ち現身世尊の言行を、ありしまゝに想

見せしむべき經典は何なるやと云ふに、阿含經と四分律とを推せざるを得ざるべし。しかも此等の經律も、世尊滅後三四百年間の思想を混成せしものなれば、中には後に興るべき大乘經典の思想は、諸所に含まるゝを見るなり。さればもろくの大乗經の根本義の何たるかを思ふべき、常にこれらの原始經典の中に、その原型を認めうべきもの多し。

惟ふに、釋尊の説法は、決して單純なるものゝみにはあらざりしなるべく、加ふるに、釋尊以前の宗教に負ふ所多かりし世尊に於ては、後によりて前を推し、新しきを以て故きを温ぬるに、その淵源や古く、その思想やまた單純なるものにはあらざりしなるべし。

第十八課 四

諦

然らば原始經典に於ける現身世尊の説法とは、如何なるものなりしか。われらはこの問題を提げて、この經典を拜する時、第一に初轉法輪として有名なる四諦の説法に、耳傾けざるを得ざるなり。

抑々、世尊は絶ち難き愛著を斷ち、陥りやすき世累を脱れて、修行求道に幾年の歲月を経たまへり。その求め給ひしものは、生死の變易に處し、流轉の人生に障へられざる、常住の安立をうるにありき。かくて一たび正覺の曉に至りたまふや、一切の世相は煩惱滅盡の清淨眼に映じきたりて、洞徹無礙の解脱知見をうるに至り、遂に世を厭ふの人ならずして、世を救ふの人となりたまひぬ。

かくて大覺の世尊は、菩提樹下なる靜觀思惟の座を起ちて、徐に宣教化導の途に就きたまふに、はしなくも鹿野苑林に住せる五比丘に遇ひたまへり。然るに五比丘は、未だ世尊の内證自覺を知らざる

のみならず、却つて迷ひ荒みてその雄志を失へるものとして、世尊を侮り蔑み、呼ぶに瞿曇なる俗姓を以てし、遇するに同等なる朋友として接しまつりぬ。茲に於て、世尊自ら言く、

「如來至眞等正覺に對して名を以て呼ぶ莫れ、また友として接すること莫れ。我れは是れ聖者なり、今已に甘露を得たり。汝等能く承受せよ、不滅の智明は現前し、我れ之れを示す、我れ今法要を説かん」と。

惟ふに、この一場の光景こそ、轉法輪の先驅として、特に注意すべきものにして、こゝに世尊は如來として姓名以上の人たるを不し、また苦行を捨てしことの、聖道に背きしにあらざるを諭したまひしなり。かくて郊外の林苑靜かにして、樹蔭風涼しき處、一人の大覺者は五人の修行者と相對して坐せしなり。而してその口より出づる

甘露

苦

集

滅

第一の宣言こそ、げに如實真相の四方面として説きたまひし、四諦の法門にてありしなれ。即ち、世尊の言く、

「何等をか苦聖諦となす。生も苦、老も苦、病も苦、死も苦、怨憎の者に會ふも苦、愛するものに別離するも苦、欲する所を得ざるも苦、要を取りて云はゞ、執着の五つの積集なる五盛陰の苦なり。」(獲得の疾苦。)

「何等をか苦集聖諦となす。一切の苦の生ずるは愛を以て本とす。愛は諸欲の境に於て、歡樂と貪欲とを伴ひ、憂愁と苦惱とを生ず。かくて、愛著の心によりて、諸處に轉生を招くなり。」(獲得の因の疾苦の因。)
「何等をか苦盡聖諦となす。愛著の心を残りもなく滅して、捨心、無欲、解脱、休息の境に住し、煩惱の巢窟あることなき是れなり。」(解脱の快徳。)

「何等をか苦出要諦とす。そは苦悲を滅盡するに至るの道にして、正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八の聖道是れなり。」(解脱の因)

「此れは苦の真相なり、此れは苦の集の真相なり、此れは苦の滅の真相なり、此れは苦の滅に到る道の真相なり。此等の真相に就いて、曾て聞かざりし法に、我が眼開け、智見生じ、明曉生じ、智慧生じ、洞見成就せり。若し我れこの四聖諦を修せずば、我れ今無上正眞道を成ぜず。然るに、我れ四聖諦に於て如實にこれを知り、今無上正眞道を成じて滞りなし。この故に汝等勤めてこの四聖諦を修すべし」と。

斯くの如く叙へ來れば、四諦の説法は實に冷靜なる談義にして、一片厭世觀に過ぎざるが如けん。さはれ、この法こそは實に世尊

が苦心内證の結果にして、世事無常の真相(有漏)と、無我寂滅の理想(無漏)を圓かに指示し、その宣説は高き人格と不動の確信とに基きて、命ずるが如く諭すが如き態度をもちて、懇に説き示したまひしものなるを思はざるべからず。さればいかに五比丘に對する感化の強かりしかを想見し得べく、五人がこの説法を聽きて世尊に歸依し、直にその御弟子となりしは、蓋し偶然にあらざるなり。

かくて、耶舍並にその朋友等、五十六人の比丘に對して、傳道の任を與へ給ひし事蹟より推するに、實に鹿野苑の説法は、後の世に於ける遺弟が信行の原則、一代諸經の根本義を教へ給ひしもの、法華經に一乘の法とあるも、亦この法の開顯に外ならざるものにして、これ誠に世尊の告敕なりき。

されば、遺弟がこの説法を初轉法輪と名けて、永遠不息なる眞理

の輪を廻轉して、道を四方に傳へ、感化を三世に及ぼす初發の説法と稱するに至りしは、誠に宜なりと云ふべきなり。

第十九課 苦

諦

(輪廻の意義)

四諦の説法は、人生の現相とその理想とを示し給ひしものにして、世尊は人生の現相を考察して、苦と集とのためなりとし、親しく修行の實驗に照して、滅なる理想とそれが實現の方法たる道とを宣へたまひぬ。されば、滅なる理想を顯はさんには、専心に種々なる修行をなさざるべからず。しかも専心に修行せんには、まづ人世の相なる生老病死等の苦しみ多き事實とその道理とを、諦かに觀察せざるべからず。されば、苦諦の教こそは厭世觀の起る根本にして、また、發心修行の原動力たるものなり。

凡そ生を愛し生を喜ぶは世の人の常なれども、吾人は更にその愛し喜ぶ生そのものを深く考へざるべからず。惟ふに、生まるゝも苦にして死もまた苦、この生死の間には痛ましき老病の苦あるのみならず、怨憎會苦、求不得苦、愛別離苦、五陰盛苦のあるあり、或は水火王賊の災ひ、自他毀害の争ひ、禽獸毒蛇刀杖等の怖れありて免がるべくもあらず、更に身内を顧みれば、涙汗濃唾等の不淨を滿たし、一たび死に至るや形骸腐爛して色を變へ、冢間に横はれば鳥獸に裂かれて諸々の悪虫を生じ、其相まことに慘鼻に堪へたり。加之、この生死は一世のみにはあらで、三世永劫に亘りて六道に浮きつ沈みつし、長夜不盡の悩みをなして、いつれの時にか盡き果つべしとも知らざるなり。經の中にはこの生死遍歴の相を述べて言く、大地一切の草木の數も、吾等が經來りし生死の數には及ばず、吾等

流轉界

がこの間に父母兄弟近親の死に遭ひて流せし涙の量は、四大海の水も尙及ばず、この生々死々一切の中に積み重ねし吾等が白骨は、堆くして毗富羅の山にも越えぬべし。

抑々、長夜生死の流轉界は、人界を中にして、天上に快樂世界あるも、その快樂盡きぬれば悲しみ却て切なり。之れを下にしては、現前の畜生界あり、乃至餓鬼より地獄に下りては苦惱いふべからず。凡夫愚人は眼前の事物にのみ拘はる故に、この廣大なる流轉の長苦を見ざるも、私心を滅し、智慧既に現身を超えたる聖賢には、歴々としてこの諸趣の流轉を掌に指して見るをうべしとは、一般佛徒の抱ける眞摯なる信念なりき。もごより輪廻の思想は佛教以前に既に存せしも、佛教は善業悪業の果報を説きて、舊來の輪廻説をその教法の中に攝して、此れを整へ、之れを詳かにして、一大系統の世界

を立し、以て佛教道德の大基礎となすに至りぬ。

第二十課 輪廻境界(その一)

(三 惡道)

第一に地獄界には、等活(地獄)、黑繩、衆合(地獄)、叫喚、大叫喚、焦熱(焦炎)、大焦熱、無間の八種に分たれ縦横共に一萬由旬、各地獄の四門の外には十六の眷屬地獄あれば、其數一百三十六の多きに達せり。

等活地獄

等活地獄は閻浮提の下、一千由旬の底にありて、此中の罪人は互に相見ゆれば直に害心を懷き、黑鐵の爪を以て裂き破りては殘骨のみとなす。獄率鐵叉を以て地を打ち、活々と唱ふれば尋いで活くること故の如し。鳥獸を殺し、人を惱ませる者は、五百歲(人間の五十年を四王天の一日一夜とす)の間この中に苦しむ。

黑繩地獄

黑繩地獄は等活地獄の下にあり、無數の熱鐵の繩を交へ横へ、罪人

を驅りてその中に入らしむるに、惡風吹き暴れて其身に絡まり、肉を焼き骨を焦す。等活地獄の苦に勝るこゝ十倍、衣食を求めんとて殺生し偷盜せるもの、又は師友の諫めをも聽かず、己が惡見に任せて自殺せる者は、一千歳（人間の百年を初利天の一日一夜とし、初利天の一千歳をこの地獄の一日一夜とす。）の間この中にて苦を受くるなり。

衆合地獄

衆合地獄は黑繩地獄の下にあり、牛頭馬頭の獄卒走り來りて鐵山の中に入らしむるに、兩山迫り來て合せ押すに、身碎け血流れて地に滿つ。或は鐵の白に入れて鐵の杵を以て搗くに、熱鐵の牙せる虎狼又は炎の嘴ある鷲など競ひ來りて之れを食ふ。邪淫邪行の者は二千歳（人間の二百歳を以て夜摩天の一日一夜とし、夜摩天の二千歳を以てこの地獄の一日一夜とす。）の間、此に墮ちて苦しむ。名高き刀葉林はこの獄中にあり。

叫喚地獄

叫喚地獄は衆合地獄の下にあり、手足長大にして疾きこゝ風（人間の手足を以て此の地獄の一日一夜とし、人間の手足を以て此の地獄の一日一夜とす。）の如く、赭き衣を纏ひ眼より火を出せる黃頭の獄卒來りて、罪人を猛炎の鐵室に入れ、鉗を以て口を開きて白熱の鎔銅を灌ぎ、五藏を燒爛して下より出すこゝ無量百千歳、罪人哀れみを乞ふに彌々暈り狂ふ。前生に水を加へて酒を賣り、或は酒を與へて人を戲弄し、若は飲酒に耽りしもの、四千歳（人間の四百歳を兜率天の一日一夜とし、兜率天の四千歳を以てこの獄の一日一夜とす。）の間この中にて苦しむ。

大叫喚地獄は叫喚地獄の下にあり、熱鐵の針を以て口舌を刺して啼くを得ざらしめ、或は熱鐵の鉗を以て其舌若しは眼を抜き出す。飲酒妄語の人は八千歳（人間の八百歳を以て化樂天の一日一夜とし、化樂天の八千歳を以てこの地獄の一日一夜とす。）の間是の如き諸苦を受くるなり。

焦熱地獄

焦熱地獄は大叫喚地獄の下にあり、熱鐵の大地に投げ臥せ、熱鐵の棒を以て左右に轉して焼き薄らげ、或は熱鐵の串を以て下より頭

に貫きて灸る。或は惡風罪人を吹きあげて輪の如くに虚空に轉し、忽ち刀風來りて砂の如くに身を碎いて分散す。殺盜姪飲酒妄語並に邪見の者、萬六千歲（人間の千六百歳を以て他化天の一日一夜とし、他化天の萬六千歳を以てこの獄の一日一夜とす。）の間此にありて苦を受く。

大焦熱地獄
中有

大焦熱地獄は焦熱地獄の下にあり、殺盜姪飲酒妄語邪見並に持戒の尼僧優婆夷を誘ひて其心を壞りしもの、此惡業の人は中有にて、大地獄の相及び獄率の手足極熱し、その聲迅雷の吼ゆるが如きに大恐怖を懷く。獄率罪人の咽を縛りて漸々に下ること十億由旬にて閻王の呵責を受け、遠く大焦熱地獄の大火災を見、又遙かに罪人啼哭の聲を聞いて大に悲愁恐怖す。漸々近づくに大火聚の高さ五百由旬、その廣きこと二百由旬、罪業の然らしむる所、急に身を火聚に擲らて墮つること大山の一時に頽るゝが如し。或は一切の身皮を剥ぎて

阿鼻地獄

肉を侵さず、これを熱地におきて沸々たる熱鐵を灌ぎ、無量億千歲の中にありて大苦を受く。

阿鼻地獄は大焦熱地獄の下、欲界最底の處にあり。頭面は下に、足は上にありて落つること二千年、縱廣八萬由旬にして、七重の鐵城鐵網ありて刀林周匝し、四方に形四十由旬の大狗ありて、眼は電の如く齒は刀山に似て、一切毛孔より晁惡なる猛火を出す。十八の獄率は各々六十四眼を有し、口は夜叉の如く、頭に八の牛頭あり、一々の頭に十八の角ありて猛火を出し、牙は高さこと四由旬、火は流れて阿鼻城に滿てり。城内には八萬四千の大蛇もしは鐵峰の毒を吐き火を吐くあり、或は五百億の虫ありて、各八萬四千の嘴より火の流るゝこと雨の如し。かの有情は火焰と雜りて間隙なく、何れが人か何れが火かを分ち難し、たゞ號叫の聲を聞いて衆生ありと知る。

或は熱鐵の炭を重き鐵の箕に負うて、大熱鐵の山を登りてはまた下る。その苦いふべからず、その臭氣また言語に絶せり。五逆罪を造り、因果を撥無し、大乘を誹謗し、四重を犯じ、虚く信施を食する者、もしは佛像を焼き、僧房を焼き棄て、僧の臥具を焼き、佛の財物を取り、僻支佛の食を奪うて自ら食せる者は、一中劫の間この無間地獄にありて大苦を受けざるべからず。

餓鬼

第二に餓鬼道には、地下五百由旬の閻魔の界邊(諸鬼の本處にして此より他處に散居す)に棲めるご、人界の中にては、水邊、林中、嶮難處、塚間、或は僧寺の食堂、又は樹の中に棲める等ありて、針口、食吐、食糞、無食、食氣、食水、希望、食唾、食髮、食血、食香、疾行、伺便等の種々ありさせられ、小は一尺より大は雪山の高さに及ぶものあり。此界に墮するものは、五百歳(人間の一月を一日一夜とす)の間、常に飢渴の苦惱を受け、水を見て

畜生

飲まんごすればその水忽ち火となり、食を得て食はんごすればその食忽ち猛火となり反て身を焼く、若しは腹は大山の如くなれご、口は針の孔の如くにて食ふに由なし。前生に慳貪嫉妬の心を懷ける者、或は自ら美食を噉ひて妻子に與へず、或は名利を貪りて不淨説法をなし、もしは衆僧の園林を伐り、衆人の陰涼樹を伐る者等、此界に墮ちて苦しむなり。思ふにこは恐らく佛教以前の宗教に於ける祭られざる幽鬼の類にして、佛教に攝し來りて種々に區分せられしものなるべし。

第三に畜生道とは、禽獸虫魚の類の互に強弱相害して、晝夜暫くも安んずる能はず、たゞ常に水草を念じて淫欲の情に強きもの、前生愚癡無慚にして徒に信施を受け、他物を借りて速かに償ふことをせざりし者、皆この界に墮ちて苦を受くるなり。

第二十一課 輪廻境界 (その二)

(三善趣)

阿修羅

第四に阿修羅とは、古代の主要なる諸神を阿修羅と呼びて、神々の恐るべき魔力的方面を讚嘆するを常とせるも、後にはその魔力を魔神として非天若くは悪魔と爲し、遂に諸神に敵對するものと爲すに至りぬ。佛教に攝し來るや、勝るゝ者は須彌山の北なる大海の底に住み、劣れる者は四大州の間なる山巖の中に住し、もし雲雷鳴る時は天鼓と思ひて大に戰慄すと云ひ、又、諸天の爲に侵害せられて身を傷け其命を滅ぼすと傳へらる。前生に憍慢を起し諍ひを好みしもの、死して此生を受け、日日三時に諸の憂苦自ら來りて惱害すといふ。

人間界

第五に人間界は無常不定にして諸苦充滿せること既に述べたるが

不淨觀
骨鏤觀

如し。如之、人身の不淨臭穢なること言ふべからず、この故に世尊も此に愛著し憍慢を起さん者には、不淨觀若しは骨鏤觀を修すべきを勧めたまへり。されば、幼少より老境に至るまで、唯是れ汚穢不淨にして、經には海水を傾けて洗ひ淨むともその甲斐なく、而も外には端嚴の相を顯はし、内には唯もろくの不淨を裏めること、恰も美はしき瓶に糞穢を盛るが如しと言へり。吾等愚痴の凡夫、ひたすら外に好容を視て、内の不淨を觀ずるの明を缺きぬ。その常に顛倒に著しては相叫喚し、世塵盛に興りては黒雲慘憎たるの狀、誠に憐れみの極みといふべし。

天上界

第六に天上界には欲界、色界、無色界の三界を分ち、各々に諸天ありて、其相實に廣汎なり。今三界諸天の名數を表示すれば次の如し。

分段食

により四級に分ちて四禪天(四靜處天)と稱す。初禪天は分段食を要せざれば鼻舌の二識なく、たゞ眼耳身意の四識のみありて喜受と樂受とを成ず。この天の第三位なる大梵天は佛の出世毎に必らず最初に來りて轉法輪を請ひ、また佛の右邊にありて佛を護るなり。二禪天は意識のみにして眼耳身の三識なければ、喜受と捨受とを成ず。この天の第三光音天は、音聲を絶ち、語らんと欲する時は口より淨光を發してその用をなす故に光音天と名く。三禪天また意識のみなれど二禪よりは怡悅の相淨妙なれば樂捨の二受を成ず、四禪天は不苦不樂の捨受のみを成ずる所にして、中にも第九の色究竟天は、阿迦尼叱天、摩醯首羅天、大自在天、または有頂天とも稱して、形體を有する天處の究竟なり。(毘舍闍摩醯首羅は鬼類にして暴惡なり。淨居摩醯首羅は勝妙の天形にして佛位を超ぐなり。)

無色界

次に無色界とは形體も宮殿もなく、たゞ識心のみ存して深妙なる

禪定に住する故に無色界又は四空處と名く。而して無色なる故に方處を定め得ざれども、果報勝るゝを以て色界の上によりとすなり。四天の中非想非々想處は三界の最頂にありて、定心極めて靜妙にして、下地の如き麁想なければ非想といひ、なほ細想なきにあらざれば非々想といひ、痴の如く、醉の如く、眠の如く、暗の如く一として愛樂すべきものなければ、泯然寂絶清淨無爲の境地なりといふべきなり。

諸鬼神

而して此等の整頓せる天界諸境の外に、佛教は尙ほ多くの諸神諸鬼をも包含せり。即ち大辨才天(美音にて歌ふ故に妙音天ともいひ、智慧福德を主る天神なり。)、吉祥天(功德天ともいひ、毘沙門天の妹なりとも后妃なりとも云ひ、功徳成就して大功徳を衆生に與ふ。)、大黒天(降魔の大黒は忿怒の相を現じ、施福の大黒は愛樂の相を現す。印の徳成就して大功徳を衆生に與ふ。)、鬼子母神(五百鬼子の母にして人を敬ふ惡神なりしも、後に護法神となり、安産の神とせらる。)、堅牢地神(堅牢は地神の名にして、衆生を療し怨敵を降伏せん時に祈る神なり。)、散脂鬼神(毘沙門天王の八大將の一にして、その下に二十八部衆ありて、世間を巡行し善惡を賞罰すといふ。)、及び八部

衆さて、天(自然の果殊妙にして、身に光明を具する故に天と名く)、龍(神力を有して、雲雨を變化す)、夜叉(空中を飛行する鬼神にして、人肉を喰ひ、病を起さしめ、奇聲を起して、惡戯をなす)、乾闥婆(琴を弾じて佛を讚嘆す、帝釋天の樂神なり)、阿修羅(容貌醜惡にして、常に帝釋天と闘ふなり)、迦樓羅(金翅鳥にして、兩翅相去ること三三三六萬里、常に龍を噬りて食す。風雨惡宙を止むる時に祈るなり)、緊那羅(乾闥婆の妻にして、樂神なり)、摩睺羅迦(大蟒神にして、人形蛇首なり)等ありて、何れも人の眼を以て見る能はざる故に冥衆八部といひ、その他海神、河神、樹神、山神、空神、晝神、夜神等の無量百千の鬼神ありて、世界は宛ら鬼神を以て充滿せしむるに至りぬ。

天人五衰の相
 惟ふに釋尊の教説の中には、既に此等の諸天部を認め、布施持戒の修福によりて生天せんことを勧めたまひし跡あり。固より佛教はこれらを究竟の境界とはなさずして、有の世界としての輪廻の諸境界なれば、業盡きぬれば天人五衰(衣裳垢膩、頭上花萎、身體臭穢、腋下汗出、不樂本座)の苦あり、たごひ色界無色界といへども退没の苦ありとして、此等の上に涅槃の悟界を建て給ひしなり。而して此等の諸天の多くは印度宗教の諸神を

包含せるものなれど、佛教はその理想に達する方便として此等を攝し來り、以て諸神本來の性質及びその位置を變更して、佛教の守護神となし、遂に今日の佛教的生天思想を成ずるに至りしなり。

第二十二課 家

苦は人生の現相にして、一たび生をこの世にうけたるものは、暫くも免がるゝ能はず。而して此等の諸苦の起るや、正にいふ所の家あるに由らずんばならず。されば釋尊教團の佛弟子は、いづれも世俗を離れし出家隱遁の形を示したまひぬ。蓋し家は業果の報ひによりて、遙けき輪廻の道をたどり來し人々の集まりなれば、互に盡きせぬ繫縛の苦しみに障へられて、超脫自由の心を得ること難きに由らずんばならず。されば經には世尊が家の過失を説きたまふに、誠

家の過惡

に慇懃を極め、吾人をして自ら緊肅の思ひに住せしむるもの存す。即ち世尊、郁伽羅長者に告げて言はく、

「家は是れ諸々の善根を破る。家は是れ深き棘刺の林に入るに、自ら出づるを得ざるが如し。家は是れ清白の法を壊る。家は是れ諸々の悪覺觀を起す住處なり。家は是れ弊惡不調なる凡夫の住處なり。家は是れ一切の不善を行ずる住處なり。家は是れ惡人聚會の處たり。家は是れ貪欲瞋恚愚癡の住處なり。家は是れ一切苦惱の住處なり。家は是れ先世よりの諸善根を消盡するの處なり。凡夫この家に住して、作すべからざるを作し、説くべからざるを説き、行ずべからざるを行じ、父母師長を輕んじ、諸尊福田沙門婆羅門を敬まはざるなり。家は是れ貪愛憂悲苦惱衆愚の因縁たり。家は是れ惡口罵詈刀杖繫縛の住する處にして、凡そ未だ種るざる善根は種るす、已に種

るたるは能く壊る。凡夫この中にありて、貪欲瞋恚愚癡の因縁によりて惡道に墮し、父母兄弟妻子眷屬車馬を愛して貪求を増長して厭足あることなく、戒を持たず、定を捨離し、慧を觀ぜず、解脱を得ず、解脱知見を生ぜず。家は是れ滿ち難し、海の流れを吞むが如し。家は是れ足ることなし、火の薪を焚くが如し。家は是れ息ひなし、覺觀相續すること空中の風の如し。家は是れ聖道を妨ぐる障礙なり。家は是れ鬪亂の因縁にして共に多瞋呵責して違諍す。家は是れ無常なれば久しきも失壊す。家は是れ假名無我なるに、轉倒貪著して有る爲す。家は幻の如し、假借和合して實事あることなし。家は夢の如く、朝露の如し、一切富貴も須臾にして滅ぶ。家は蜜の滴の如し、其味甚だ少し。家は棘叢の如し、五欲の味を受けんこと意に人を刺傷す。家は是れ鍼嚙の虫の如し、善く覺觀せずして常に人を接

食す。家は淨命を汗し、欺誑を行ずること多し。家は是れ憂愁の本、王賊水火惡親の壞する所、且つは諸々の錯謬やむことなからん」こと。かくて、長者に布施の徳を示し給ひ、次で更に發心出家の功德を、在家の常行大施の福德との優劣を對比して言はく、

出家と在家

「在家は則ち無量の過惡あり、出家は能く無量の功德を成ず。在家は則ち潰闇にして、出家は即ち閑靜なり。在家は則ち諸塵垢に染み、出家は則ち諸塵垢を離る。在家は則ち五欲の泥に没し、出家は則ち五欲の泥を出づ。在家は淨命を得難く、出家は淨命を得易し。在家は怨賊あり惱礙ありて憂ひ多く、出家は怨賊なく惱礙なく喜び多し。在家は惡道の門にして、出家は利益の門なり。在家は則ち戲調にして、出家は寂滅なり。在家は愁ひ多く卑陋にして垢門に隨順し、出家は愁ひなく高顯にして淨門に隨順す。在家は小法を成就し、出家

は大法を成就す。在家は涙乳血海を増し諸佛僻支佛聲聞に呵賤せらるも、出家は涙乳血海を竭し諸佛僻支佛聲聞に稱歎せらる。在家は知足せず衆魔喜び破れ易く衰へ易きも、出家は知足し衆魔憂ひ破れ難く衰ふことなし。在家は是れ奴僕にして、出家は主上なり。在家は永へに黑闇の生死にありて、出家は明照の涅槃を究竟す。在家は諸根を降伏する能はざるに、出家は能く降伏するを得。在家は則ち傲誕にして卑陋なれども、出家は謙遜にして尊貴たり。在家は則ち諂曲にして憂ひ多けれど、出家は則ち質直にして喜び多し。在家は箭の身にあるが如く、出家は身の箭を離れたるが如し。在家は惡法を行ずる故に速に老ゆれど、出家は善法を行ずるが故に常に少壯なり。在家は雜毒の漿を飲みて衰耗すれど、出家は則ち甘露の漿を飲みて衰耗なし。在家は則ち孤窮無舎にして歸するに處なきも出家は親愛

有舍にして歸すべきあり。在家には無盡の事務ありて罪會多きも、出家にも事務あることなくして福會あり。在家は易行、出家は難行。在家は順流、出家は逆流。在家は漂流、出家は乗筏。在家は此岸、出家は彼岸。在家は官法に隨ひ、出家は佛法に隨ふ。在家は婦を以て伴となし、出家は堅心を以て伴となす。在家は則ち他を侵惱するを貴しとせども、出家は他を利益するを貴しとす。乃在家は深榛に入るに、出家は深榛を出づ。

眞宗

茲に於て、吾人は大聖世尊がいかに出家生活を讚歎したまひしかを知るに共に、その教團の比丘衆ならびに滅後の遺弟が、諸種の惑亂の中にも此生活の形式を持続し得たる原動力を推するに難からず。されば出家隱遁こそは佛道の正しき制規にして、在家生活の形式を採れる眞宗の如きは、佛教の俗化若しは一人進展にして、まさしき

常道にはあらずと言ふべきなり。

第二十二課 集

(煩 惱)

なべての苦惱は、吾等の卑しき欲愛を基として生じ來るものなれば、欲愛の心なきをこそ、安樂の天地に住する尊き人は云ひ得べけん。されば世尊の證悟も欲愛の解脱にあり、またその諸弟子に對する教化に於ても、常に欲愛の根の斷すべきものなるを第一に誠しめたまひぬ。

惟ふに、八苦充滿の安穩なき世界はいかにして生じ來りしか。そは吾等が止めんとして止むる能はざる、諸々の惡徳の報ひにぞある。即ち樂の執着なる貪、苦の嫌忌なる瞋、蠢々として覺者の法に従はざる痴の三は、古へより三毒三縛三穢三火三流等と稱へ、吾等

三毒を増長し、三毒によりて諸種の悪徳を發露して苦惱の人生を造り、以て生死に流轉するに至る。而してこの欲愛が外界と相應して、人生を組織する連續を秩序よくのぶるを十二因縁と稱し、また苦の集ともいふ故に、集諦とは苦惱の人生成立の因縁を探求するをいふなり。

抑々世尊の出家は常に苦惱の實相に基き、これを滅するを目的とし、この目的の爲にその因縁を求め給へり。されば無明、行、識、名色、六處、觸、受、愛、取、有、生、老死の十二因縁は、老死等の諸苦の源因を無明にありとし、無明を破するによりて一切の苦を脱るを得とするなり。即ち、老病等の相あるは生あるためにして、人は我見によりて生老病等を觀ずる故に苦を感ずるなり。この生の因は有にして、有即ち流轉の存在なる故に生ありとするなり。而し

十二因縁

我見

てかゝる流轉あるは、一に生存せんとする意欲即ち執着深き取(煩悩)ある爲にして、この取の根本は欲愛によるもの、この愛こそは生存の中心、苦の大本にして、苦惱の尋求はこれを以て最終に達せるものなり。されば、これより上はいかに縁起の本を求むるも畢竟理論を主とする思考に過ぎずして、實行を先とする宗教としては、この欲愛の滅盡に心を注ぎて精進すれば足れり。されば、無明の一を除ける行、識、名色、六處、觸、受等の六は、欲愛の原因といはんよりは、寧ろ欲愛流出の機關を分立せる者といふべし。即ち欲愛の流出は、眼耳鼻舌身意の六官によりて、吾等の心が外界と接して苦樂の感即ち受あり、受はまた觸あるがためにして、その觸れて六感覺の生ずるは六處即ち六官あるがためなり。この六官あるは身體の生存ある故なれば、その心身の生存を總括して名色とせるに外ならず。

その名色が一團となりて人格的存在あるが如く見ゆるは、一に「我れ」なる意識あるによるものにして、こは正しく六感の中心なれども、別に常住の體あるにあらずして所縁に従うて變轉流動するものなり。さはれ、その流動は刹那々にその内容を異にし目的を異にすれど、自らその間に統一あるを自覺する故に、識には散れるを集め、流るゝを貫くに似たる活動の力ありといはざるべからず。この集成一貫の力を行は名くるなり。而して、最後の無明は苦空無常無我の世を淨樂我常の世と誤まり、無實を實として、執着して行識等の我見を起し、空しくその中に蠢動せしむる無知に名けしもの、即ち情的盲動なる欲愛を、再び智的に解説して無知蒙昧に歸せるに外ならざるなり。

あゝ、欲愛と無明、この二こそはげに一切苦惱の源泉といふべし

ん。世尊が出家したまひしも、誠にこの二を斷滅せんとしてなりき。世々のひぢりの出家も、亦この二を除かんためなりき。その爲には身命をも顧みずして求めたまへり。吾人はこの生死の根本たる、はた又天魔波旬の所居たる、十二因縁の要義につき、深く省慮する所なかるべからず。

第二十五課 五

蘊

(人間の成立要素)

人の生活は、身體の組織と身體が外界と相應して生ずる、もろくの現象を基とせり。この生活を組織する成分を蘊といひ、その成分に、色、受、想、行、識の五ある故に、之れを總稱して五蘊と名くるなり。

第一に色蘊とは、吾人の肉體及び外界の事物の總名にして、觸れう

四大

る物、即ち分ちうる粗なる者なれば、變壞質礙の義を有する者なり。人の身はまづ此物質の組織によりて成るが故に、外物に刺激せられ、冷熱の變に動き、饑渴の病に苦しめらる。かゝる物質を色と名くるは、佛教特有の名稱にして、その色を更に細分すれば地水火風の四大より成るもの、一切の萬物はこの四大の集合の多少によりて、種々不同の性質を成ずるものなり。されば四大相集りてあらゆる形ある物を造り、更にこの身を造り、この身を養ひ、またこの身を刺激するなり。

受蘊

第二に受蘊とは、此身に苦樂を感じしむる感覺にして、六感を機關として外物に觸るゝより生ず。即ち眼に色を見、耳に音を聞き、鼻に香を嗅ぎ、舌に食を味ひ、身に觸れ、意に思ひては、諸欲の境に貪着する働きに名けしなり。

想蘊

第三に想蘊とは、心の中に受け入れし境につき、種々に想ひ浮べて赤白、多少、美醜等を、分別し倒想し知覺する作用に名けしものなり。されば受は諸欲の境を味受して貪欲の心を起し、想は種々の轉倒邪曲なる思想により更に貪欲を増長し、以て生死輪廻を重ねるなり。聖者は諸欲の境に於て樂受善受捨受に對する語を感じざるにはあらざれど、それに貪著せざるなり。吾人は諸欲の境に對して樂受を感じるのみならず、更に愛味の念を生ずるは、一に倒想邪念の然らしむるに由らずんばあらず。

行蘊

第四に行蘊とは、十二因縁の行と同義にして、感覺知覺等の活動を成さしむる内に名けしもの、即ち感ぜしむる者ありて感官境は感じ、外界境は刺激して感覺知覺は生ずるなり。此力こそは、一方には受及び想の活動を呈すると共に、一方には外界をして覺の中に入

識蘊

らしむる力といふべく、以て物と心との二者を貫ける根本の力を行蘊といふなり。

第五に識蘊とは、この統一の力を精神の方面に代表し、且又、意識の事実として現はれし受及び想を統一する主宰たるものなり。

惟ふに、十二縁起にては行を以て識の因とし、行を以て欲愛流出の諸機關を代表して、その能動能作の力と爲せり。されば行は欲愛發表の根本力にして、又身心組織の原動力たり。五蘊また要するにこの行の活動に歸し、行の集威力に支持せらるゝ身心の組織分子といふべく、五蘊假りに相集りて身心の生活をなすといはんよりは、寧ろ行が五蘊を作成し集成してこの生活をなさしむといふべきなり。されば集諦にては、受想等の心所並に此等を主宰する識の心王と雖、常に遷流生滅の現象に過ぎざれど、此等の現象の中心に、力として

心王

の行即ち根本意志の能動ありて、これが形として發表すれば、五蘊を集成して身心の生活を営ましむるものなるを知るべきなり。

されば吾人が通常心と云ひ來れるは、念々に生滅する無常のものなれど、眞の心とは力としての行をこそいふものにして、生滅無常の根柢に常住の光を存し、生死にも解脱にも主體たるもの、佛教は吾人が轉倒の受想並に識を脱して、身行を滅し、口行を滅し、意行を滅し、正受滅の境に出入して心の自在に入れる状態をば、見性とも見心とも亦三昧に入るともいふなり。されば如來の十號の中にも、明行足の稱あるは大に味ふべきなり。而してこの行の發現なる生死と涅槃との考察の相違によりて、今日の佛教各宗の成立を見るに至りしものなるを忘るべからざるなり。

第二十六課 滅

諦

(無我の眞境)

複雑なる苦界の成立も、歸する所は欲愛我欲を親因とするものなれば、この因をだに滅すれば従つて一切の惡徳煩惱憂愁を滅して、生死を解脱するを得るなり、されば解脱の要義は、欲愛の滅殺より滅盡に進むに存し、いかなる境遇地位にある人も、一心解脱すればこの生に苦樂あることなく、苦樂を離るれば貪欲瞋恚の擾亂にも煩はさるゝことなし。而して、欲愛滅盡に達するには、まづその滅殺の實行を要するも、亦智眼の開發を忽せにすべからざる故に、比丘達は常に行住坐臥屈伸俯仰の間にも、無常無我の理を觀念し、苦樂感覺の來往を觀知するに努めたりき。

あゝ、諸行無常、諸法無我の理こそは、正しく佛教の根基にして、

諸行無常
諸法無我

また比丘達の常に隨順せんとする所なりき。貧の苦み、病の痛み、愛の悲み、別れの歎きの一々に會ふ毎に、人はその苦惱云ふべからざるに、教團の比丘達は嚴かに靜かに此等を逃れて、跋提尊者の如くに、「あゝ樂し」と叫びつゝ、過すを得たるは、一に此道理を體現せるに由らずんばあらざるなり。

さらば、無常無我とはいかなる理りなるか。抑々、一切の事物は因縁所生にして、人の心身は五蘊の集合によりて成ず。因縁和合によりて生ずる故に因縁に従て滅し、五蘊集れば個人を成ずるも散ずれば個人なし。而してこの因縁の成立を尋ぬるに、人は欲愛によりて執着し、執着によりて迷ひの存在をなし、迷ひによりて苦界即ち我執の生活を營む。されば一切の事物は、因縁より成る上より見れば、生滅にして無常なり(諸行無常印)。また一切の我執の生活も、その源は五蘊の

集成に外ならざる故に、その真相には我執あることなくして無我なりといはざるべからず(諸法無我印)。この無常無我の理りを知らざる故に、無常を常住として愛著を起し、無我に我ありとして我執を生じて、苦惱息むことなきものにして、この理を事毎に仔細に諦観するにより貪愛遠離の境に進み入り、根なき樹の自ら枯るゝが如く、苦惱の世界、燃燒の世界は自ら滅するを得るなり。滅すこ雖も、世界そのものが滅盡消散するにはあらずして、苦樂貪著に見し世界が滅するなり。即ち凡夫と聖者と、同じく無常無我の真相を、一は愛著によつて苦惱を感じ、一は苦惱を了知して之れを遠離するに存す。而して無常無我の真相に苦惱を覺ゆるは、無明の結果にして、その真相を見て寂靜の理想に達するは明智に由るといふべし。如來の法といふも、この法界の真相に外ならず、こは實に如來の出世不出世に拘

涅槃

はず常住にして、如來はこの法界を覺得し洞察し、以て世にこの真相を顯示せられしに過ぎざるなり。

さはれ煩惱の滅盡といへば、涅槃は消極的の理想なる如きも、既に現身を超絶せる到彼岸の人にありては、世界の動搖人生の苦樂は、そのまゝにして而もその心を動かすに足らず。恰も炎熱の路を歩みて後、樹下の涼風に浴し、清泉の凉水に渴を醫するものは、その中に單に炎熱渴水の苦みを除きしのみならぬ安樂愉悅ある如く、涅槃の涼風は煩惱の炎熱を消したる消極の趣きのみならず慶喜安穩の風光あるを知らざるべからず。瞋恚の心、嫌忌の情を退治するは、その反對に親愛哀愍の心を養ふ所以にして、諸種の惡徳の退治は、同時に善徳の増進なるを思はゞ、涅槃は單に消極の一面を示すものにあらざるを了するを得ん(涅槃印)。

有爲
無爲

第二十七課 涅槃の眞境

佛教は善惡禍福苦樂等の有爲の凡てを超越せる處に、無爲寂靜の理想ありと教ふ。而して世尊は永き思惟の後、この理想を實現し、その道の保證となり、直に強き權威を以て、この道を歩むことの急要なるを宣示し給へり。

さはれ涅槃の眞境は、高遠にして難見なり。若し世相の言説を假りて之れを説かば、その純眞の相を失ひ迷情に墮するの恐あり、四諦の教は、厚始佛教の根基なりと雖、既に滅諦を現じて苦集を解脱せるものには四諦もその用なし。四諦といひ、十二因縁といひ、皆世界人生の現實相としては眞理なるも、涅槃の理想はこの現實を超越する所に存するものなれば、此等の教は人を導くの眞理にして第

我法二執

一義の眞相にはあらざるなり。

抑々、佛教は煩惱滅盡を以て修行の第一要諦とせる故に、その涅槃なる理想も亦實行の方面を重んじ、敢て始めより秩序的にその眞相を明かにせんとはせざりき。我法二執の滅盡は心解脱にして、心解脱の中には無量無限の慈悲あるを示し、以て現身生活中に一切を融合する心證相應の境地を教へぬ。されば現身の生活をつゞけつゝも心解脱の境に入れば、則ち滅諦の理想を實現せるもの、かゝる人は他より見ればこの世界に生活せるも、その人は既に三界超勝の境界に住せるものなれば、修行者の諸漏已に盡きて安住し、作すべき事を果し、煩惱の束縛を斷じて更に他の生存に入らず、正智の中に解脱を得たる聖者と云ふべし。聖者と雖もその宿業によりて作り出せし五體の存續する限りは、その五官は尙外境を感ずべし。さはれ

有餘涅槃

五感ありとも、執着なき故に苦樂好醜皆なるがまゝにならしめて之れに染むことなければ、その心には貪瞋痴の惡徳再び生ぜざるものこれを有餘涅槃と稱す。而して一切の感じに對して何等の覺をも起さず、身業の生ずべき一切の状態を斷絶して有無の境を脱し、以て個人的存在を謝して無限に合一せし清涼寂靜の境地を無餘涅槃と稱し、通常聖者の身命終る時を以て、この状態に入るものとせらる。

無餘涅槃

これ阿羅漢位の最終理想とする所にして、また灰身滅智に入ることも稱するなり。灰身滅智とは強ち現身消滅の状態といはんよりは、寧ろ心清淨の極致を指したる言にして、此状に入れば心は清淨透徹にして三世を知り、宿命に通じて己が永遠の姿を見、天眼を得て彼我の隔りを脱して人間一切の善惡を透見し、以て三明六通自在の人たるを得。従つてその死後を待たず、現身生活の修養によりて實現し得

べき状態にして、心が本性に歸り、本來の清淨を得れば、その結果三明の通力をも得べく、かくて行業の果報盡きなば入滅すべきなり然れども通常かゝる涅槃は、死によりて始めて完全に得らるるにせらるゝものにして、此くの如きの死は悲みといはんよりは、寧ろ真正永遠の歡喜ともいふべし。この境地を佛教には、常住とも無上とも永遠とも最高とも稱せるものにして、有無を離れ時處を絶したる境なり。而して遺弟は決して消極的理想に甘んぜしにあらざるに共に、佛教がいかにかこの永遠の歡喜境を表示するに、苦心せしかを思はざるべからず。

第二十八課 應身佛

世尊一たび無餘涅槃に隠れたまふや、遺弟が追慕の至情は、過去

應身佛

佛未來佛等の形式を生ずること共に、その在世の時に於ける尊き明行具足の靈格を應身佛と稱しまつりて、その敬虔なる信賴の念ひを表はしぬ。即ち應身佛とは、衆生の機宜に應じて化度せんために、幽妙なる靈界より形を此土に現はし、八相示現したまへる色身の如來なりとの意なり。

そもく、無常必滅の理は、師主を失ひし遺弟が唯一の慰藉なりき。さはれ如何に世累を絶ち、人世に意なき高潔なる遺弟といへども、かゝる理のみにては師主哀慕の深き悲みをみたすを得ざりき。されば遺跡崇拜または過去佛等に偲ぶと共に、世尊の入滅は實に圓滿なる大涅槃界なりとの慰藉を要せり。かくて八相成道の形ちと共に、八十年の一生はこの大涅槃界より影現したまへる應身佛なりとの考に想ひ到りて、遂に歴史的な人格を現實より離して、理想化し三十二

相八十隨形好等の相好、十力四無所畏^乃十八不共法三昧六通等の力用を添え捧ぐるに至りぬ。今、應身とはいかなるものなりやを考ふる一助として、此等の名を列せん。

三十二相

- 一 足下安平相
- 二 足下千輻輪相
- 三 手足指纖長相
- 四 手足柔軟相
- 五 足跟廣滿足相
- 六 手足縵網相
- 七 足趺高好相
- 八 臚如鹿王相
- 九 手摩膝相
- 十 馬陰藏相
- 十一 身縱廣等相
- 十二 毛孔青色柔軟相
- 十三 身毛上向右旋相
- 十四 身金色微妙相
- 十五 身光面一丈相
- 十六 皮薄細滑(不受塵垢)相
- 十七 七處平滿相
- 十八 兩腋下滿相
- 十九 上身如獅子相
- 二十 身廣端直相
- 二十一 肩圓好相
- 二十二 四十齒相
- 二十三 齒白齊密相
- 二十四 四牙白大相

- 二十五 方頰車如獅子相
- 二十六 咽中津液得上味相
- 二十七 廣長舌相
- 二十八 梵音深遠相
- 二十九 眼色如金精相
- 三十 眼睫如牛王相
- 三十一 眉間白毫相
- 三十二 頂上肉髻相

八十種好 (隨形好)

- 一 無見頂
- 二 鼻直高好孔不現
- 三 眉如初生月
- 四 耳輪埵成
- 五 身堅實如那羅延
- 六 骨際如鈎鎖
- 七 身一時廻如象王
- 八 行時足去地四寸而印文現
- 九 爪如赤銅色薄而潤澤
- 十 膝骨堅著圓好
- 十一 身淨潔
- 十二 身柔輭
- 十三 身不曲
- 十四 指長纖圓
- 十五 指文莊嚴
- 十六 脉深不現
- 十七 蹠不現
- 十八 身潤澤
- 十九 身自持不逶迤
- 二十 身滿足
- 二十一 識滿足
- 二十二 容儀備足

- 二十三 住處安無能動者
- 二十四 威震一切
- 二十五 一切樂觀
- 二十六 面不長大
- 二十七 正容貌不撓色
- 二十八 面具足滿
- 二十九 唇赤如頻婆果色
- 三十 音響深遠
- 三十一 齋深圓好
- 三十二 毛右旋
- 三十三 手足滿足
- 三十四 手足如意
- 三十五 手文明直
- 三十六 手文長
- 三十七 手文不斷
- 三十八 一切惡心衆生見者和悅
- 三十九 面廣殊好
- 四十 面淨滿如月
- 四十一 隨衆生意和悅與語
- 四十二 毛孔出香氣
- 四十三 口出無上香
- 四十四 儀容如獅子
- 四十五 進止如象王
- 四十六 行法如鵝王
- 四十七 頭如摩陀那果
- 四十八 一切聲分具足
- 四十九 四牙白利
- 五十 舌色赤
- 五十一 舌薄
- 五十二 毛紅色
- 五十三 毛潔淨
- 五十四 眼廣長
- 五十五 孔門相具足
- 五十六 手足赤白如蓮華色

- 五十七 齋不出
- 五十八 腹不現
- 五十九 細腹
- 六十 身不傾動
- 六十一 身持重
- 六十二 其身分大
- 六十三 身長
- 六十四 手足淨潔鞮澤
- 六十五 邊光各一丈
- 六十六 光照身而行
- 六十七 等視衆生
- 六十八 不輕衆生
- 六十九 隨衆生音聲不增不減
- 七十 說法不著
- 七十一 隨衆生語言而爲說法
- 七十二 一發音報衆聲
- 七十三 次第有因緣說法
- 七十四 一切衆生不能盡觀相
- 七十五 觀者無厭足
- 七十六 髮長好
- 七十七 髮不亂
- 七十八 髮旋好
- 七十九 髮色如青珠
- 八十 手足有德相

三十二相
八十種好

抑々、三十二相は印度に於ける理想的大人の相にして、この相あるものは家にありては轉輪聖王となり、出家しては無上正覺を成ずと信ぜられぬ。而して八十種好は、三十二の相を更に細別して形容せ

るもの、眉は初月の如く、行歩は鵝王の如し、唇は頻婆果の色に似て、儀容は獅子の如しといふ如き、何れも佛徳の譬喩的讚嘆にして、更に佛陀業用の偉大を示さんごては、世尊を醫王といひ、日月といひ、光明といひ、或は身紫金色なりと云ふに至りぬ。かくて譬喩と事實とは、何れの國にありても混じ易く、わけて豊かなる空想に富める印度の人々には、譬喩は多くは事實と見らるゝに至り、世尊の徳を日月に比せし遺弟は、また世尊が眞に金色身を有したまひしが如くに考へ、或は佛身が金山金樓の如くに光明徹照せりごて、その千輻輪を讚嘆するに至りしなり。惟ふにかゝる大人の相好は、佛徳と民間の説話を結びて、逝き給ひし世尊の人格を神人に化し、遂に丈六の應身佛なる信仰とは成りしなり。

而して十力(是處非處力、業智力、定力、根力、欲力、)四無所畏(一切智無所畏、漏盡無所畏、說盡苦道無所畏、)

十力

四無所畏

十八不共法

三明六通

十八不共法(十力、四無所畏、)、三明六通(遍處智證通、天眼智證通、宿命智證通、神足智證通、天耳智證通、他心智證通、)等は、悉く世尊の自覺覺他の勝用を表示せるものにして、十力は衆生の有縁無縁又は智慧所念を知り、宿命天眼漏盡の通力あるを云ひ、四無所畏は、如何なる大衆の中にありとも、正法を獅子吼して怖畏することなき自信の、堅くして動かすべからざるを示し、十八不共法は十力四無畏を以て衆生に對するごとき、その信不信によりて喜憂を生ぜざる三念住と正念正智の大悲とは、實に世尊不共の徳なることを示し、三明六通は不可思議自在の力にして、經には世尊が説法の際、先づ神通を現じて神異を示し、然る後ち説法し給へりご記せり。三學所證の法徳として、正智解脱の人は誰人もこの境地に至るを得べけんも、而も世尊が果してこの不思議力を供へたまひしや否やは明言し得ざる所にして、恐くは當時の聖者得通の信仰を世尊に添加せるものな

らん。龍樹菩薩の「難一切智人」の論は、世尊の六通自在を否定せられしもの、遺弟が哀慕の情はこゝに應身佛なる信仰を生ぜるも、而も嚴として世尊は枯影の一沙門なりしなり。

第二十九課 法身佛

應身佛は幽妙なる靈界より化現し給ひし色身なりとは、げに遺弟が醇乎たる信念の發露といふべし。さらばその靈界とはいかなるものなるか。

曩に世尊は阿難に對して言く、「何人か衆僧をして我れに隸屬せしめんごするや、阿難、我れは衆を支持せんごするにはあらず」と。一見すれば世尊が謙遜もしは自信の乏しきを示すが如きも、こはこれ色身の無常にして依るべからざれば、永遠不滅の法をこそ唯一の燈

とすべきを示されし教にして、正に遺弟が歸依の根基は、世尊所説の教法に存するなり。而してこの教法とは即ち四諦の法なれど、四諦の究極は滅諦涅槃に存す。この涅槃は世尊成道の根柢にして、また吾等に宣示し給ひし眞理の道なれば、諸佛成道の大本もこの法にあり、諸佛の菩提智慧といふもこの法に外ならず。されば教法とても單に口舌の説法、文字の教法に止まらずして、佛智の本源、衆生成道の大本たる超世不滅の實在ならざるべからず。されば阿含經には、「諸法之本、出於如來神口」ことも、また「世尊爲法主、法由世尊」こともあれど、更に轉じては「肉身雖取滅度、法身在」といひ、或は「彼沙門瞿曇、依法住法、以法而言」とありて、初に佛の法たりしもの、後に法の佛と思惟するに至りしを推すべし。かくて在世時に於ける三寶歸依の中心は佛寶にありしも、滅後に於ける歸依の重心は法寶に存するに

法

至れるを知るべし。而してかゝる佛身の基なる法は無限常住にして、遺弟がその教法訓誨に基きて如法に修行するは、則ち世尊の教法が活力を以て永存久住し、その眞正の生命を發展しつゝあるものにして、その悟得と修行とが人心を靈化し得る限り不滅の法なれば、正に世尊自身の力ともいふべきなり。而してかゝる不滅の法は世尊と共に生ぜしものなりや、即ち師なくして自覺し給ひし世尊は、その菩提眞理の作者にして、その眞理には三世に亘る根據なきやといふに、こは過去久遠の時にも、未來永劫にも存し、一切の三世諸佛もこの眞理を悟得し給ひしもの、この故に無師自覺の世尊も、その法は永遠なる法にして、古人の踏み行ひし道を得たまひしに外ならざるなり。されば世尊が體現したまひしこの法は、過去の諸佛の成道したまひし源泉にして、また一切衆生得脱の正因たり。一切の道

法身佛

法はこの三世通貫の一乘道にして、世尊の教法は正にこの眞理を體現せる法なりき。佛の法が遺弟の如法修行によりて久住すといふも、歸する所はこの永遠の法の存するが爲といふべきなり。茲に於てか、法は世尊より出づといはんよりは、寧ろ世尊は法より出づと云はざるべからず。故に應身佛は法身佛の一顯現もしくは權化といふべし。即ち滅諦涅槃の考察は、遂に遺弟追慕の至情と相合して、佛現在したまふこの法身佛を想定するに至れり。さはれ法身とはいへ、現象の身にはあらで、常住の眞身、不滅の本體なり。一切諸佛の成道はこの法身の體得にして、凡夫の修行と信と慧とは之れを得る方法といふべし。

かくて法身佛の信仰は、合理的には深奥なる旨趣を示し、信仰的には現在佛の要求を満し、單なる過去の追想、または未來に對する希

望にあらずして、これによりて直に佛陀との交渉を開くを得るに至りぬ。羅馬は一日にして成らず、そも茲に想到するまでには、遺弟が戀慕涕泣しつゝ探り求めし、苦心の眼を察せずんばあるべからず。

第三十課 報身佛

吾人は現身世尊證悟の源頭を尋ねて、法身佛久成の思想を見たりき。而して法身佛には通常色もなく形もなしといへ、こは現世超越の常住の眞身には、如何なる言辭比類を假るも、尙之れを顯はすに足らずこの意にして、經論には壽命無量、光明無量、並に常樂我淨の四徳を以て、法身の甚深なる性徳を顯はせり。さはれ後の世に世尊の人格的光輝薄らぐにつれて、空漠なる無色無形の本體のみ考へらるゝに及んでは、遂に遺弟の醇乎たる信念を失ふに至り、茲に

報身佛

敬虔なる宗教的要求に應ぜんために、再び進んで法身佛の業用とし、具象的説明を假らざるを得ざるに至りぬ。かくて現身世尊教化の事蹟に顧みて、慈悲攝護、功德超勝の報身佛を成ずるに至れり。

凡そ三世諸佛同一道の思想より見れば、その因行も果位も、固より大差あるべからず。此故に菩薩本生の願行なる、四弘誓願と六度の行とは、諸佛同じく相違あるべきに非ざるも、しかも本願思想の附帶せる佛陀と、その附帶せざる佛陀と存す。本願特に別願殊勝の佛陀は容易に歸仰者をうるも、本願の明かに發せられざる佛陀は、殆んど名義上の佛たるに止まり、獨立に信仰の對象となることなきなり。即ち過去佛の如きは、他佛若しくは他衆生の因位を説明する授記佛たるに止まる故に、誓願佛としては明かならざるなり。之れに反して未來佛には、本生に本願(過去昭光如來のとき、實行菩薩として、成神、照曜、吉祥の三徳具足の本願を起す。或は所施成就、所願成就、慈

彌勒の本願

藥師の本願
地藏の本願
阿閼の本願
法藏菩薩

成就、悲成就、善權成就、智慧成就等あり。ありて、將來の希望を繋ぐを以て、之れを理想とし、之に歸托を求めんとしぬ。さはれ遺法繼承の任は、釋尊より獨立するを得ざる故に、その別願殊勝の信仰も、遂に彌勒には附するに至らざりき。而して藥師如來には十二願(無量光、增勝光、無量智、趣向大乘、修梵行、諸根具足、衆病疾除、轉女成男、引正道、得解脫、妙味飽滿、衣服隨念)あり、地藏菩薩には六道衆生能引道の願あり、阿閼佛には斷瞋欲の本願あり、この他諸佛菩薩の本願少からず、されど無量壽經の法藏菩薩四十八願の如き精廉は見る能はず、就中、他力救済の本願は、諸種の本願思想中に異彩を放ちて、諸佛最勝の別願たるを示せり。

抑々、無量壽經の特色は、本願と慈悲とに存す。その報身彌陀の本願には諸種の内容を包むも、要は攝法身、攝淨土、攝衆生の三類を出でず。而してこれら本願思想の根柢に入らんか、全く化他を本とせざるなく、念佛修善の易行、淨土莊嚴の設意、一に佛陀無限の

慈悲に基かざるなきは言ふを待たず、その攝法身の願また衆生を成就せんが爲に外ならざるなり。果して然らば本願の凡ては衆生のためにして、一々の願文に佛位を賭して其成就を誓ふ、その發願の牢固なるを示しては、假令身止、諸苦毒中、我行精進、忍終不悔といへり。惟ふに法藏比丘の發心出家、五劫思惟、永劫修行、選擇本願、莊嚴淨土、抑々彌陀の佛身も亦吾人凡庸の救済に外ならずといふべし。

さはれ吾人は法藏菩薩を以て、地上現實の人なりきとは信ずるを得ざるなり。阿彌陀佛の信仰は、決して法藏菩薩なる現實界の人物に發せしにはあらで、現身佛追慕の至情が、その佛陀人格の一面たる慈悲攝護の温容の因りて來る所を、法身佛の業用に認め、佛の慈悲たりしものが慈悲の佛となり、以て本願他力の方面に發達せる理想の結晶なりといはざるべからず。されば智慧を主とする聖道に反し、

一に人情を酌量して深遠なる慈悲を知らしめんとして、報身彌陀の始中終を恰も人類の傳記を見るが如くに説けり。これ表面は酬因感果の佛を描きて地上に現はれたる井泉となし、裏面には法身常住の思想を含みて地下に没せる伏水となしたるもの、他力本願の救済がいかにして法身佛より顯はれ來れるかを知るべきなり。

かくて他力本願の教は、大なる進展を爲して諸經所讚となり、遂に上下二千歳の史實と、東洋幾萬人の思想とに關するに至りぬ。吾人は今更の如くに、現身世尊の威大なる慈悲覺他の餘熏に驚くと共に、遺弟が求道の至誠に、限りなき感謝を捧げざるを得ず。

策三十一課 佛 土

世尊の教法、之れを一面より見れば直截簡明なりと雖、後代佛教

が一大發展を遂ぐべき萌芽の已に此に存せるに見るに、蓋し佛陀内證の源泉は思ふに勝りて深長なるものあるが如し。

抑々、涅槃は三界生死の輪轉以上に超脱せる、不可測不可量の無爲涅槃なれども、もしこれを大樂安穩の所とすれば、何物かを認めざるべからず。即ち世尊の入涅槃を述ぶるに、四禪を経て滅盡定に入り、下りて復た初禪より四禪に入りて般涅槃すといひ、或は佛は威神力ある故に自ら化身をなし、その土の衣服を着、その語言を用ひ、三界を遍觀するに涅槃最樂なりといへるが如き、これ明に入滅の如來を諸天以上とし、その涅槃は天上の諸樂以上に最大安樂なるの意を示せるに外ならず。而して涅槃に方處を定むる如きは、原始佛教に見ざる思想なれど、若し積極的の名稱を用ふる時は、此に天部以上の或存在となさざるべからざるに至るべし。従つて之れを

化身

形容し想像するには、諸天の莊嚴を聯想するを以て寧ろ捷徑なりとし、茲に佛土の構想は成じぬ。

應身土

佛十號

かくして第一に構成されしは、釋迦佛出現の土即ち應土なり。これはこれ國に二王なく、天に二日なきが如く、佛は此世に於ける最勝尊なりとし、如來、應供、等正覺と尊び、明行足、善逝、世間解、無上士調御丈夫と仰ぎ、また天人師、佛、世尊と敬ひし世尊の一人たび入涅槃したまふや、追慕の情はその身を應身佛とし、その八相示現し給ひし土を應土として理想化し、ついで過去佛未來佛出現の土をも、王城、父母、子、人壽、種姓、道樹、說法、弟子等を擧げて之れを清淨善美のものとなし、以て前生の誓願に由りて得たまへる勝妙の土たるを示しぬ。特に彌勒出現の國土の如きは、衆生と佛と國土とが、恰かも轉輪聖王の好世に際會せる如くにして、遺弟が

希望の情の、いかに厚かりしかを想見するを得べし。されどその模
型は、畢竟釋迦佛出現の土を出でざるなり。

報身土
法身土

是れより一層藝術的表現を假り、神話を交へて、報土の莊嚴な
せしは、これ一段の構想を加へしものにして、法身土の如きは之れ
と平行して、涅槃の理體に土名を附し、幾分具象的に示せるに過ぎ
ずといふべし。

抑々、諸佛の淨土は遺弟の求めて已まざる理想國にして、その構
想はたゞひ當代思想の色彩を免れざるも、もし經典作者の意よりせ
ば、滿腔の熱情をこめて、理想の境界此に在りとの思ひを以て、萬
人に示せる超絶界の光景といふべし。さらばその講想の素材いかん
といふに、その行樹、欄楯、池溝、園林、講堂、階道、又は風吹散
華、還到本國、待立左右、不寒不熱、無衆惱患、飲食自然等は、何

西方淨土

れも釋尊以前の宗教に於ける諸神界の構想に類し、また佛教に包攝
せる諸の天部に適應するより見るに、淨土の莊嚴は諸天諸神または
豊富なる印度の自然より取り來れるを知るべし。しかもその諸天諸
神の材料は、正に人界より取れるなり。されど諸天の莊嚴は五欲の
具にして無常のものなれば、直に苦界に輪廻するの恐れあれども、淨
土の莊嚴には轉生の恐れなきのみならず、諸鳥も園林も行樹も飛鳥
も七寶も皆念佛念法念僧の音をなし、衆生此等を樂みつゝ、而もこれ
に染着することなく、進退共に世染を離れて自性寂滅なりとせり。さ
れば淨土は諸天の莊嚴に、佛教的意義を附せるに由るものにして、こ
れ即ち曇鸞大師が「無生の生」と言ひし所以ならずんばあらざるなり。
惟ふに諸佛各淨土あり、ひゞり阿彌陀佛の西方淨土は、その莊嚴の
完全せること殆んど他佛の標準といふべく、げに「超諸佛利最爲勝」

の讚に違はずといふべし。加之、諸佛淨土はこの身先づ往生して後、見佛聞法と修行證果との縁を成ぜん爲なるに、彌陀の淨土には往生即成佛の大果を得しむること、茲に報身彌陀の慈悲攝化の無限なるを思はざるべからず。

第三十二課 道

誦 (八聖道)

老病死憂苦の法を逃れて、不老不病不死無憂無苦の無上涅槃安穩の境に到らんには、いかにして尋求すべきかは、萬人の聞かんことを欲する所なり。

世尊は無上菩提の境に入らしめん爲に、こゝに入聖道を示したまひて、一切衆生を淨化し度脱せしむる唯一乗の法を説きたまひぬ。げにこの道は、憂と苦との絶滅、菩提と涅槃との實現の道にして、

菩提と涅槃

三世の諸佛またこの道に乗じて彼岸に上りたまへり。
抑々、八聖道とは正見、正思惟(正)、正語、正業、正命、正精進(正)、正念、正定の八種にして、何れも不善無智の邪道に對して、菩提の聖道を示し給ひしなり。

第一に正見とは、因果應報の理を信じ、父母師長の別、此土彼岸の別を明かにし、四諦の理を究めて、無漏聖心を以て菩提の道の求むべきを知るをいひ、之れに反するを邪見と名く。

第二に正思惟とは、五欲の念ひ、瞋恚の念ひ、害他の心を離れ、更に無漏心に相應して思慮決定をなし、以て眞智を増長せしむべく、之れに反するを邪思惟と名く。

第三に正語とは、妄語兩舌惡口綺語を離れ、無漏心を以て聖道を歩みつゝ、正語するを云ひ、之に反するを邪語と名く。

正語

正思惟

正見

正業

第四に正業とは、殺盜媾の身邪業を離れ、無漏心にして清淨の身業に住するを云ひ、之れに反するを邪業と名く。

正命

第五に正命とは、如法に衣服飲食臥具湯藥を求め、もろくの邪命得に著せず、無漏心清淨の正命に住するをいひ、之れに反するを邪命と名く。

正精進

第六に正精進とは、種々に方便して出離に向ふに常行不退なるをいひ、無漏の勤を以て體とす。

正念

第七に正念とは、念つねに正道及び助道に隨順して不妄不虛、憶念不斷なるをいふ。

正定

第八に正定とは、心不動不亂に住して、もろくの寂止三昧に入り、心身離脱の境に住するをいふ。

これらの八法は、悉く邪非を離る、故に正といひ、能く通じて涅槃

戒定慧の三學

に至れば道と名く。而して之れを戒定慧の三學に配すれば、正語正業正命の二は戒にして、正思正精進正念正定の四は定に相當り、正見の一は求道の最初にしてまた最終といふべく、佛教の理を信じてその理に得入するには、戒定の二によらざるべからず、かくて正見を獲得して煩惑を斷じ、以て入證得果するを得るなり。即ち智は行を進め、行は智を助けて證りを成ずといふべし。されば三學八聖道は離るべからざるものにして、孰れも相俟ちて涅槃に趣向せしむるなり。

第三十三課 三十七道品

七科

涅槃に到る道路の資糧として、佛教は四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七菩提分に八聖道を加へし七科を建て、以て三十七分

四念處

法または三十七菩提分法と名けて、種々に知行一致の修道を策勵し來りぬ。

即ち四念處とは、身受心法の四によりて心を一處に集注し、雜念の起るを防ぎて觀慧を發すに勉むる方法なり。身念處とは、林間の靜處に入りて直身正面に結跏趺坐して、一々に行住坐臥、屈伸飲食、寤眠語默を自覺し、此れによりて身の動作を制御し、次に身の不淨について、爪齒皮肉、骨髓腎肝、心肺脾胃等より、糞尿涙汗、涕唾膿血等の一切を觀じ、又身の成分については、地水火風の四大所成なることを分析觀念して、身の成立變化を明知し、更に身の死相を觀じては、屍を墓邊に捨て、次第に腐爛し、皮肉去り骨のみ残りて終には塵に歸するを觀じ、かくて一切の欲想を絶たしむるなり。次に受念處とは、苦、樂、非苦非樂の感覺の起る相を明かにし、身體に

關するものご然らざるものごを細かに觀察して、一切苦樂の感は畢竟のものにあらざるを知りて、一切の欲愛を調伏するなり。次に心念處とは、眼耳鼻舌身意の六識によりて起る欲心無欲心、瞋心無瞋心、痴心無痴心等の善惡を自覺し、念々生滅の心相を觀察して心無常を了知し、以て一切の欲心を制するなり。次に法念處とは、一切諸法の生滅變化の因縁を觀察して、心の動搖を制し五蓋を排除して無我の理を悟了するなり。要するに四念處は注意の集注によりて、身心内外の實狀を審かにする自觀自制の修行にして、經には此修法の注意を論して言はく、「人あり滿鉢の油を持して世間の美色及び大衆の中を過ぎ行かんに、若し一瞬にても心を外物に奪はれなば忽ちして油を鉢外に注がん。此時もし後に人ありて劍を抜きて之れに従ひ、一滴の油にても落さんに汝を殺さんといはゞ、この人は身命を以て

油を守り歌舞遊戯に心を散らさざるべし。惟ふに四念處は、一切衆生を淨化する一乘道にして、吾等が常樂我淨の四顛倒を破し、不淨苦無常無我の真相に達せしめ、以て世の憂悲苦惱を去る唯一の不死の法といふべし。一切の惡想惡行も此れによりて去り得べく、一切の善想善行も此れによりて生じ得べく、諸種の觀法も一に此中に攝盡すといふべきなり。

四正勤

次に四正勤(四正勤)は、四念處と同じく心の制御法にして、第一に未生の不善は之れをして生起せしめざらんが爲めに精進に勤行す(律義)。第二に已生の不善は之れを絶ちて生ぜざらしめん爲に勤行精進す(斷)。第三に未生の善法は之れを生ぜしめん爲に精進す(律義)。第四に已生の善法は之れを増大し久住せしめん爲に勉む(修習)。されば四正勤は四念處に基きて、比丘の行作を無放逸にせしむる方法なり

懺悔

而して律儀斷の實行には先づ六感を制し、目をして美色に迷はざらしめ、耳をして美聲に誘はれざらしむるに勉む。二百五十戒等の止持門これによりて興る。斷々を修するには、欲念恚念害念等の生ずるに従うて之を絶滅し廢棄すべく、もろくの懺悔法もこれが爲に起る。隨護斷には骨想、膿想、屍想、壞想、脹想等の不淨觀、又は無常觀慈悲觀等のもろくの觀法を愛護增長するにあり。修習斷には律儀上の作持門を初め、遠離滅欲のために七菩提分を修するなり。

四如意足

次に四如意足(四如意足)は、四正勤に次いで修する行品とせらるゝものにして、四種の禪家引發の用意なり。佛弟子は四念處によりて智慧を修し、四正勤によりて正精進を修し、精進智慧いよく、多きに比して定力劣弱なれば、今四種の用意を以て心を攝むる故に、定慧均等に於て所願皆得ざるなき故に如意足と名く。第一の欲如意足(欲如意足)は、證

果に到るべき願望を起し、この願望に心を集め、心を制して定を引發するなり。第二の精進如意足はこの願望に精進することにして、第三の心如意足は精進によりて一心專注して亂れざるをいひ、第四の思惟如意足は專注して理を觀するにより定を引發し、以て三明六通の神通力を得て、無漏智の内證に到らんとするなり。

五根

四不壞淨信

次に五根とは、信根、勤根、念根、定根、慧根の五にして、この五法よく煩惱を伏して一切善法を生ずる本なる故に五根といふ。而して信根とは、世尊を師主と仰ぎ、その教法を信じ、僧伽に身を托して僧伽の戒を奉ずるもの、即ち四不壞淨信を起し、之れによりて預流果を得る故に預流分といふ。次に精進根とは、善法を修め、惡法を治するため、心を專にし行に勇勤なるを云ふもの、正に四意斷の修行なり。次に念根とは一心に世尊の教誡を憶念して、四念處

五力

を修するにあり。定根とは四如意足によりて禪定を發修し、慧根とは無漏智の證悟を得る知見をいふ。

次に五力とは、信力、勤力、念力、定力、慧力の五にして、五根増長して、もろくの邪信、懈怠、邪念、亂想、惑想を破する功德力用に名けしものなり。この中、信は一切道行の基にして、慧は一切道行の上首なれば、勤念定の三力は慧見開發のための方法ともいふべし。さればこの五根五力の中には、佛道修行の總體を包括しまたその始終を貫徹せるものといふべし。

七覺支

次に七菩提分(七覺支)とは、念、擇法、精進、喜、猗、定、捨の七にして、菩提實現の修行として要用なるものなり。

念覺支とは、身心を靜かにし、四念處等の勝法を明記して、勤勉修習の力を得るなり。擇法覺支とは、念覺満足すれば善不善、罪無罪、

勝劣、黑白等の諸法を分別して、一切の不善を捨て、善に赴くを修習するなり。精進覺支とは、この分別撰擇を實行するは精進にして勤習努力の修習なり。喜覺支とは、精進方便によりて如法の修行その歩を進むれば、そこに進徳の喜びありて、もろくの食想を離る。猗覺支とは、歡喜満足し身心猗息して安靜平和を得るなり。定覺支とは身心の平利充分なれば、進んで定心禪定の修行に入り靜止不亂を得。捨覺支とは、此くして得たる禪定靜止の心は、自ら貪愛苦樂の情を超越して、捨の安樂を得るに至り、以て無畏を成じて衆生清淨なるを得るなり。佛弟子はこの修行によりて無學果を證し、遠離無欲滅捨の境に入るなり。

此外、念の修行には種々ありて、骨鑠觀、無常觀、不淨觀貪欲を停止する法等と共に、慈悲觀瞋恚を停止する法、因緣觀愚痴を停止する法、界分別觀我見を停止する法、數息觀散亂心を停止する法

五停心觀

等あり。後には界分別觀に代ふるに、念佛觀業障多き人を修すを加ふるあれども、何れも五停心觀として入道初門の觀法とせられぬ。中にも數息觀は、世尊が佛弟子に勸め給ふ所多く、自殺せんこの心を懷ける者には、特に此法を勸めて身の機能を平穩にし心を靜めしめたまへり。尙ほ少欲、知足、遠離、精勤、正念、定心、智慧、不戲樂の八大人法を説き、或は利他に約しては、慈悲喜捨の四無量心または布施愛語利行同事の四攝法を説きて、いづれも菩提實現の方法に備へたまへり。

四無量心

四攝法

要するに佛教の道行徳目その數多きも、歸する所は信を以てその出發點とし、戒を以て身口意の所行を謹み、従うてこの淨化の心を靜慮に入らしめ、以て眞智を研きて眞理に隨順せる生活を證するにあれば、専ら戒定慧の三學に歸入す。されば佛教廣しと雖、この三

學に極まること、誠に明かなりといふべし。

第三十四課 釋尊及び内衆の生活

佛家の常用なる人法不二の語は、微妙なる意味ありといふべし。法
と人と相離れざれば、世尊の教法はそのまゝ、世尊の人格として實現
さるゝなり。されば諸法無我といひ、諸行無常といひ、四念處觀とい
ひ、七菩提分といひ、諸所に説き示し給ひし種々の教法は、悉く世尊
の人格の馨りに外ならざるなり。世尊は六年の辛酸を嘗め、無上涅槃
を證したまひては、その芳薫を衆に示したまふのみならず、自ら尙ほ
日々の行修を勵みては、一世の範となりたまへり。三十七科の道品も、
偏へに自ら愛玩し給ひし所なり。加之、四無量心といひ、四攝法と
いひ、實に溢るゝばかりの慈愛の表現にして、智慧と慈悲との兩面

布薩

は、諸の教法の中に遍く、經卷を拜する毎に吾等は愛慕の情禁じ難
きものあり。而して山に入り、森に入り、或は巖上に坐し、或は夏
の三月には伽藍に住みて遠く市中の喧擾を避けて静修の縁を求め、
晨朝おき出で、は晡時の静觀をなし、時食を求めんごては鉢を携へ
て市中に行道し、歸り來りては堂内に止まり又は林中に坐して夕に
至る。その威容を仰ぎ見し弟子達は、いかに尊崇の念に打たれしか。
されば夕暮禪定より出で給ふを待ちては、弟子達の來りて教を乞ふ
ものあり、或は在俗の信者を引見し、又は外道の論難に應答しては聖
道を示して透導し給へり。その他王者學者をはじめ、鍛工の純陀、理
髮師の優波離、姪女の菴婆波離、大賊の鴛崛利摩羅に至るまで、諄々
ごして自證の法を説き示して、階級の上下を見たまはざりき。ごに
満月の夜は布薩の大會に於て、月光さし入る大堂のうち、又は月清き

苑林に坐して、雲集せる庶衆のために説法したまひき。されば教團内衆(七)の生活も、専ら世尊を範として佛陀を信じ、法を僧伽を尊敬し、不放逸に身心を制御して、その靈性の開發を計り、内に自證し、外に慈悲を垂れて一切を讚美し、苦樂の二邊を捨離しつゝ、靜に世を去りしなり。

惟ふに、世尊は明行具足の聖者にてましくつゝ、尙ほ五十年一日の如くにその修練を怠らず、自ら修めまた衆にも修めしめ給ひぬ。されば徒らに机上の空論を玩びて分析綜合することは、後代の論師佛教に屬するものにして、世尊は此等を戲論として斥けて、専ら實修をして豊富ならしめ給ひぬ。されば佛教は、一步は一步より堅實なる修得を要する故に、諸種の修行階段を分つに至りぬ。かくて世尊滅後、その人格の輝き漸く薄らぐと共に、世尊を理想化して及びも

得ざる高遠のものごなし、遺弟はまた罪惡觀の深きに沈潜して、遂に小乘大乘の差別を立て、小乘にては三賢四善根及び四向四果の名目を立て、大乘にては五十二位の階級を分ちてその證悟の難修難得たるの趣を示すに至りぬ。簡明直截なりし世尊の教法も、こゝに至りて煩瑣なる教理となり、複雑なる行法となり、加ふるに外道の教行を混じては、益々複雑なる儀式を生じ、神祕なる行法と變じ、遂には客星往々にして帝座を冒すの奇觀を呈して、功利的現世祈禱を以て佛教の威大なる點と見做さるゝに至り、世尊の自燈明法燈明の教は正に消え滅びなんとするの狀を呈するに至れり。然れども如何に佛教は擴大され、數千の經卷、數十の宗派は分ることも、その根基は正に世尊が實修實證して、これを衆庶に説き示し給ひし四諦八聖道の教法の外を出でざるなり。

第三十五課 他力念佛

善知識
稱名往生

世尊が入涅槃したまふに臨みて、侍者阿難に遺して言く、「阿難、汝は汝自身の燈火たれ、汝自身の庇廕たれ、他の庇廕を求むる勿れ」と。されば自燈法燈、自歸依法歸依は、佛教修道の大本にして、諸弟子は世尊が自知自證したまひしが如くに、自ら精進に勤修せざるべからざりしなり。然るに淨土往生の教にありては、阿彌陀佛の慈悲攝護と善知識の強縁とによりて、信心念佛の信行を勸むるもの、まことに天地霄壤の差ありといはざるべからず。さらば稱名往生の思想は、世尊の教のいかなる點より進展し來りしものなるか。抑々、世尊在世時にありては、親しくその人格及び修道の状を拜したるも、滅後にありては教法を以てその遺身として、之れに聞き、

念佛

之れに頼らざるべからず。されど如何に師主の言教に信順するの思ひ強くとも、師主を失ひし淋しき遺弟等は、自燈法燈のみにては何もなく心に満たざる思ひを生じ、遂に善知識を以て外の強縁とし、是れによりて解脱の目的を達せんせりき。加之、肉身雖取滅度法身在、この信念は、益々遺弟をしてその加被力を念願せしめて止まらず。かくて三寶の中にも佛寶を最尊最上とし、是れを禮拜し、恭敬し、稱念するの功德また大なりとして、遂に念佛となるに至りぬ。況んや六念念佛、念法、念僧、念戒、念施、念天。、十念念佛、念法、念僧、念戒、念施、念天、念休息、念安般、念身、念死。の中には念佛あり、五停心不淨觀、慈悲觀、數息觀、因緣觀、念佛觀。にまた念佛觀あり。その他、經には「正身正意、結跏趺坐、繫念在前、無有他想、專精念佛」といひ、或は「念佛無貪欲」といひ、或は承事禮佛に五事功德端正、好樂、多財、牛長者家、生天。ありといへり。かくて信佛歸佛は、遂に念佛とならざるを得ざるなり。然れどもこの念

觀佛

佛は、自知自證の佛教と離れざるものにして、未だ他力念佛の義にはあらざるなり。

更に思ふに、かゝる念佛は觀佛と相離れず、後に佛身考察の進展と共に、佛の相好莊嚴身を觀するに至り、特に觀無量壽經には彌陀報身の依正二報の觀察法を示し、淨土論には二十九種の莊嚴を觀察して、觀佛の功德と如來攝護の力用とを示すこと明かなり。

抑々、觀佛の目的は、如來は最勝功德を積集したまひしものなれば、かゝる如來と心靈の感應を成じて、曠劫以來の罪業深き愚痴無智の身の、佛道修行に堪へ難ければ、佛の身相を觀じて現前に來現するを見、以てその愛愍攝護を受けて修道を成ぜんこの希望に出でしものなり。而して觀佛の方法は、身に禮拜をなし、口に佛名を稱し、意に佛を憶念して、身口意の三業一致する所に始めて成就する

ものなれば、觀佛は同時に稱名と離れざるものなり。されどこは上根上機の人には可能なるべけれど、小根小機の羸劣の凡夫は、容易に觀佛すること能はず、況んや在家繫縛の生活を營むものには及ぶべくもあらず、かくて稱名は觀佛より脱化して、稱名往生の思想は成就せられ、遂に定心念佛は散心念佛と變ずるに至り、こゝに他力稱名の信行は興されしなり。

あゝ自燈明か他燈明か、自力奮進か他力信賴か、二千有餘年の史實と、五千有餘卷の經典と、東洋幾萬人の思想とは、正に何れを語らんとするか。われらは敬虔なる態度を以て、その本旨の何れに存するかを研尋せざるべからず。われらは完全なる自己の謙遜と、完全なる自己の威嚴とは、その歸趣に於て一なることを知る時あらば他力教が自力教と背反するものにあらざるのみならず、正に他力教

こそ自力教の眞意を、最もよく表示せるものなるを領する時あるべしと信ず。

佛 教 讀 本 終

大正十二年六月五日 刷
大正十二年六月十日 發行

定價金九拾錢

不 許
複 製

著 作 者 眞宗京都中學

右代表者 加 藤 智 遵

發行 者 兼 西 村 七 兵 衛

發 賣 所 京 都 市 東 六 條 中 珠 數 屋 町 法 藏 館

電話 下 四 五 八 番
大阪 口 金 一 七 〇 四 番

眞宗京都中學藏版

287

616

終

